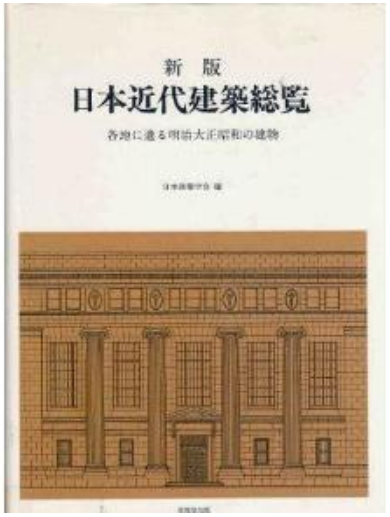
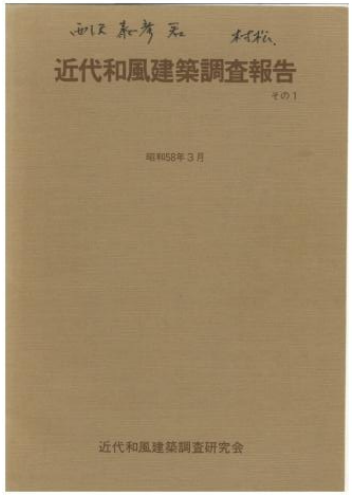
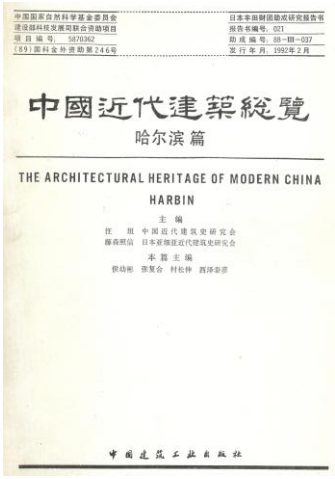
大学院講義「建築史」
日本近代建築総覧と中国近代建築総覧
東アジアの近代建築史研究
西澤泰彦最終年度イベント
お世話になったみなさまとの語らいの場その8



日本建築学会編
『新版日本近代建築総覧』
技法堂、1983年

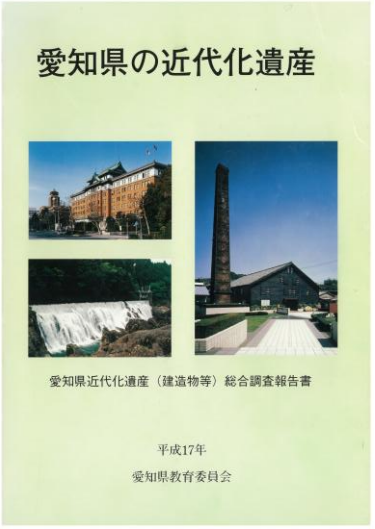


近代和風建築研究会編
『近代和風建築調査報告
その1』1983年



汪坦・藤森照信主編
『中国近代建築総覧
哈爾浜編』
中国建築工業出版社
1992年

近代建築小委員会編
「『日本近代建築総覧
(新版)』補遺」
『建築雑誌』1998年



愛知県教育委員会編
『愛知県の近代化遺産』
2003年

*

20101023日本建築学会歴史意匠委員会主催
『日本近代建築史研究の軌跡』(東京大学)
AIJ symposium, “outline of studies on history of modern architecture in Japan” in 2010.

*

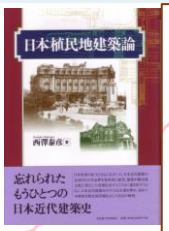
＊は日本建築学会近代建築史小委員会提供
それ以外の写真はすべて西澤泰彦撮影

西澤泰彦 NISHIZAWA, Yasuhiko

建築の歴史を考えて45年→建物をほめて40年

所属：名古屋大学環境学研究科　都市環境学専攻／工学部　環境土木・建築学科
http://profs.provost.Nagoya-u.ac.jp/view/html/100000038_ja.html

研究テーマ：
日本および東アジア地域における建築・都市の近代化に関する研究



1）日本人建築家の活動
『海を渡った日本人建築家』（彰国社・1996）
『日本植民地建築論』（名古屋大学出版会・2008）
『東アジアの日本人建築家』（柏書房・2011）
『植民地建築紀行』（吉川弘文館・2011）
『日本近代建築家列伝』（鹿島出版会・共著・2017）

2）地方都市における建築の再評価
『愛知県史・別編・文化財編』（共編著・2006）
『名古屋市中区誌』（共編著・2010）

3）建築の近代化に関する研究ー技術の視点から
『日本歴史災害事典』（共編著・吉川弘文館・2012）
『重要文化財開智学校校舎調査報告書』（2018）
『日本都市史・建築史事典』（共編著・丸善・2018）

4）都市基盤施設（鉄道・上下水道・港湾施設）の研究
「明治時代に建設された日本のドライドックに関する研究」
『土木史研究』19号（1999）
『図説満鉄—「満洲」の巨人』（河出書房新社・2015）

5）都市の近代化
『図説大連都市物語』河出書房新社（1999）
『図説「満洲」都市物語（増補改訂版）』（河出書房新社・2006）

受賞＋α
1994年度日本建築学会東海賞
第3回建築史学会賞（1999）
2009年日本建築学会賞（論文）
重要科学技術史資料認定（2024）

国際交流・国際共同研究
中国・天津大学
台湾・成功大学
韓国・成均館大学

web研究会「都市・建築から考える1900年前後の東アジア」（2021–2024）

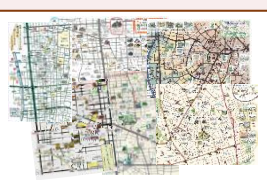
6）異分野融合研究
『岩波講座「帝国」日本の学知 8　空間形成と世界認識』岩波書店・共編著・2006）
『二〇世紀満洲事典』（吉川弘文館・共編著・2012）
『社会経済の歴史』（名古屋大学出版会・共編著・2017）
COI-Next〈未利用資源・エネルギーの把握・価値化・可視化〉（2022–継続）
『満洲　在地社会と植民者』（京都大学学術出版会・共編・2025）
『近代日本の生業と生活』（日本経済評論社・共編・2026予定）

社会への還元

1）文化財指定・登録など
例1：豊橋ハリストス教会聖堂（2009国重文＋2023耐震工事）
例2：名古屋大学豊田講堂（2011登録）
例3：明治日本の産業革命遺産（2015世界遺産登録）
例4：旧開智学校校舎（2019国宝）

2）歴史的建造物再生
例1：重要文化財片倉館（諏訪市・2022再生）
例2：重要文化財日向別邸（熱海市・2021再生）
例3：重要文化財旧額田郡公会堂（岡崎市・予定）

3）歴史まちづくりの推進
例1：名古屋市歴史まちづくりアドバイザー（2021年度終了）
例2：瑞穂うるおいまちづくり会の活動（2003–継続）



西澤泰彦最終年度イベントーお世話になったみなさまとの語らいの場						
回	分野	テーマ	概要	開催日時	開催場所	主催/呼びかけ人
1	地震被害	減災カフェ「明治時代に起きた大規模地震の建築被害の再考」	濃尾地震など明治時代に起きた大規模地震に建築被害を、その後に与えた影響、という観点から見直す。	2025/7/15 18:00-19:30	名古屋大学減災館	名古屋大学減災連携研究センター
2	中国東北	「満洲」研究の試行錯誤を語る会	長年にわたって「満洲」・中国東北地方研究にたずさわってきた研究者が、研究を進める中で体験した試行錯誤を語りながら、この地域を含めた東北アジア研究の意味、意義、展望を語り合う。	2025/8/25 14:00-17:00	名古屋大学ES総合館5階会議室1	上田貴子＋西澤泰彦
3	近代化遺産	ドライドックの成立と展開が示す日本の近代化の夜明け 藤原惠洋・西澤泰彦が語る日本のドライドック	「明治日本の産業革命遺産（製鉄・製鋼、造船、石炭産業）」の世界遺産登録のために設けられた「九州・山口の近代化産業遺産群」世界遺産登録推進協議会比較調査(造船）委員を務めた二人の専門家が日本のドライドックについて語り合う会。	2025/10/11 14:00-17:00	名古屋大学ES総合館4階講評室	西澤泰彦＋科研「喪失技術としての炭滓・鉱滓煉瓦の復元」研究班（代表：Sanjay Pareek日大教授）
4	日本近代建築史	シンポジウム「公共施設のRC造化が示すこと」	研研究班による公共施設のRC造化が持つ意味などについての成果報告と意見交換会、尹仁石、黄俊銘によるコメント。	2025/11/29 13:30-17:30	名古屋大学環境総合館1階レクチャーホール	科研「近代日本の公共施設RC造化」研究班（代表：西澤泰彦） トヨタ財団国際助成プログラム_荒木プロジェクト
5	地域連携	瑞穂を歩いて考えたこと＋得たもの	瑞穂うるおいまちづくり会（2003-現在）の活動を紹介しながら、資金が無くてもできる地域連携、外部資金とは無関係な地域連携のありかた、地域住民・市民と教員の協働の在り方を懇談予定。	2025/12/10 16:30-18:00	名古屋大学環境総合館3階講義室1	名古屋大学環境学研究科持続的共発展教育研究センター＋瑞穂うるおいまちづくり会

西澤泰彦最終年度イベントーお世話になったみなさまとの語らいの場

回	分野	テーマ	概要	開催日時	開催場所	主催/呼びかけ人
6	環境人材育成	岐阜大学講義「持続可能な地域と環境リテラシー」	岐阜大学講義「持続可能な地域と環境リテラシー」の最終回担当。「地球への恩返し ～地域ポテンシャルと建築物の長寿命化の脱炭素への貢献～」。終了後、意見交換。	2026/1/10 10:30-12:00 13:00-15:00	岐阜大学地域協学センター	岐阜大学 地域協学センター
7	歴史まちづくり	懇談会—「歴まちびと」への期待	名古屋での歴史まちづくりを支えている「歴まちびと」の方々と養成講座創設にたずさわった方々との懇談会。開催前に見学会を検討中。	2026/1/24 14:00-16:30	名古屋市市政資料館集会室	NPO法人なごや歴まちの会
8	東アジア近代建築史	建築学教室主催 「日本近代建築総覧と中国近代建築総覧－東アジアの近代建築史研究」	『日本近代建築総覧』(1980年、1983年新版)と『中国近代建築総覧(14編)』(1992-95年)の比較を通して、東アジアの近代建築史研究の進展を考える。	2026/2/3 17:30-19:00	名古屋大学ES総合館ESホール	名古屋大学 建築学教室
9	カーボンニュートラル＋脱炭素社会創造	カーボンニュートラル／脱炭素社会創造への思い	脱炭素社会創造センターの設立にかかわった方々による、カーボンニュートラル実現／脱炭素社会創造への思いとこれからの行動を語る意見交換会。	2026/2/13 16:30-18:30	名古屋大学ES総合館1階会議室	名古屋大学 未来社会創造機構 脱炭素社会創造センター
10	文化財保護	豊橋市文化財保存活用地域計画シンポジウム／PD「地域の宝・歴史文化資産の活かし方」	豊橋市文化財保存活用地域計画の文化庁認定を受けて、計画の内容と意義を広く市民に PR す	2026/2/21 13:00-16:00	豊橋市公会堂	豊橋市文化財センター
11	本	トークショー 「本を読む・探す・使う・書く・創る・売る」を考える	2024年重要科学技術史資料の選定と関連図書の展示を通じて、改めて図書(本)を考え直す企画。	2026/3/3 17:30-18:30	名古屋大学ES総合館1階 工学図書室	名古屋大学工学図書室＋一般財団法人名古屋大学出版会

授業の内容や構成

1) 10/07 グラバー邸と北京日本公使館 － ベランダ・コロニアルの持つ意味
2) 10/14 三重県庁舎と同義慶商店 － 文明開化と擬洋風建築
3) 10/21 東京駅と瀋陽総站 － 東アジアの建築家教育
4) 10/28「法隆寺建築論」と『中国建築史』 － 東アジアの建築史研究
5) 11/04 ハルビン駅と大連消防署 － 東アジアのアール・ヌーヴォー
6) 11/11 台湾総督府と朝鮮総督府 － 植民地建築と近代建築
7) 11/18 濃尾地震と明治東京地震 － 建築物の耐震性能の向上
8) 11/25 市街地建築物法と大連市建築規則 － 都市の不燃と美観
9) 12/02 台北電話交換室と亀城小学校 － 鉄筋コンクリート造の導入
10) 12/09 名古屋市公会堂と台北市公会堂 － 四大公会堂が果たした役割
11) 12/16 豊橋ハリストス正教会聖堂と聖ソフィスカヤ寺院 － ロシア正教会の受容
12) 12/23 レイモンド邸と土浦邸 － 東アジアの初期モダニズム
13) 01/13 愛知県庁舎と満洲国国務院庁舎 － 帝冠様式と「満洲国式」
14) 01/20 中村與資平と横井謙介 － 「1905年5人組」が示したもの
15) 01/27 日本支配地の上下水道
16) 02/03 17:30-19:00【最後の講義】
日本近代建築総覧と中国近代建築総覧 － 東アジアの近代建築史研究

(1) 日本近代建築総覧

近代建築の保存を訴えるためには、研究者が建築物の学術評価を行うべき。そのためには、現状把握の一環として調査が必要。

1960
- 「現存する明治洋風建築リスト」配布【1960】
- 「現存する明治洋風建築リスト」(改訂版)【1962】

1970
- 「保存したい明治建築」(「現存する明治洋風建築リスト」再改訂)【1969】

1980
- 『日本近代建築総覧』【1980】
- 『新版日本近代建築総覧』【1983】
- 『東アジアの近代建築』【1985】
- 「中国近代建築史研究会」【1986】→2年ごと

1990
- 『中国近代建築総覧-天津編』【1989】
- 「天津近代建築調査研修会」【1988】
- 『中国近代建築総覧-ハルビン編』他5編【1992】
- 『中国近代建築総覧-北京編』他6編【1994】

2000
- 『新版日本近代建築総覧/追補リスト』【1998】
- 「歴史建築遺産保護与可持続発展国際会議」【2010】

2010
- 「日本近代建築史研究の軌跡ー『日本近代建築総覧』刊行三十周年」(シンポジウム)【2010】
- 「東北アジア建築文化遺産国際シンポジウム」【2011】
- 「中国近代建築技術史研究会」【2013】
- 「東アジア近代建築史研究の軌跡と展望ー『東アジアの近代建築』刊行三十周年」(シンポジウム)【2015】

(1)日本近代建築総覧

①『日本近代建築総覧』刊行前史:
　ⅰ)「明治建築」調査
　　→「現存する明治洋風建築リスト」(1960)→同改訂版(1962)
　　→「保存したい明治建築」(同上再改訂版　1969)
　ⅱ)大正昭和戦前建築調査小委員会による調査(1974年開始)
　　→1次・2次リスト
　　→『日本近代建築総覧』(1980)
②『日本近代建築総覧』刊行目的
「明治・大正・昭和戦前期を通しての、日本近代建築の歴史の証人、文化活動の遺産のすべてを網羅した台帳」
(村松貞次郎「はじめに」)

近代建築の全体像把握:
「どこに何があるのか」

　ⅰ)近代建築研究を進めるための「台帳」
　ⅱ)文化遺産の「台帳」→「とくに重要なもの」「注目すべきもの」○印
　　取り壊しに対応;副題「各地に遺る明治大正昭和の建物」

(1)日本近代建築総覧

③調査方法とリスト作成

ⅰ)収集する情報:

現在名称(旧名称)/所在地

建築年:竣工年を基本→起工年・設計年も重要→編年化

構造＋規模≒躯体構造＋階数

設計者＋施工者

備考:その他の情報・根拠＋〇印(「お勧め品」)

ⅱ)調査方法:

a)文献調査との併用(大都市):市街地では先に文献調査

→文献に基く現地調査→「文献がすべてではない」

→市街地に対する悉皆調査

b)現地調査優先(地方都市):文献調査が難しい＋調査員が少ない

→悉皆調査不可能→目立つ物件中心

問題発生(1):調査密度に粗密発生

(1)日本近代建築総覧

ⅲ)調査対象:「近代建築とは何か」という議論
a) 建築年代に依拠:明治・大正・昭和戦前期に建てられた建物
⇒問題:時代で区切る是非
b) 建築様式に依拠:「和風の建物」を除外
←「明治洋風建築リスト」の延長⇒「近代和風建築調査」を誘発
c)「構築物」(橋梁・ダムなど)を含む⇒「近代化遺産調査」の遠因
ⅳ)リストの構成⇒問題:「リスト」だけでいいのか⇒概説＋写真を追加
a) リスト:都道府県番号＋都道府県内建物番号＝建物固有番号
b) 概説:地区ごとの概観
c) 写真:「とくに注目されるものの写真」
⇒問題:何を載せるか→「玉石混交」?⇒地区ごとに判断
不確定情報の扱い→空欄(不詳)⇒リスト掲載に意義

問題発生(2):
「時代で区切る」是非

問題発生(3):
リストだけでいいのか

問題発生(4):何を載せるか→「玉石混交」?⇒地区ごとに判断
問題発生(5):不確定情報の扱い→空欄(不詳)⇒リスト掲載に意義

函館地区

函館は，大正年代初頭から，鉄筋コンクリート造の耐火建築が数多く建設された，今国的にも珍しい地方都市である。北海道の玄関口として，また北洋漁業の基地として栄えた，かつての同地の経済力を示すものだが，同時に，明治40年，大正10年，昭和９年とほぼ15年周期で襲った大火の災禍を繰り返すまいとする，市民の悲願の結晶でもあった。

大谷派本願寺別院本堂 01011 写真，函館ハリストス正教会聖堂 01016 写真 は，明治40年の大火の復興建築の代表遺構である。前者は，伊藤平左衛門の設計，伝統様式の寺院建築の形態を鉄筋コンクリート造で造型表現したわが国最初の作品として，つとに著名な存在である。同時に，明治末年に設計された同構造の大規模建築の遺構としても貴重な存在で，構造設計は軸部のみを鉄筋コンクリート造とし，小屋組部分は鉄骨造としている。後者のハリストス正教会は，煉瓦造，河村伊蔵の設計で，観光函館のシンボルとなっている。

01011　大谷派本願寺函館別院本堂

01016　函館ハリストス正教会復活聖堂

北海道地区概説の冒頭部分(『日本近代建築総覧』1980年、1頁)

北　海　道

（函館市）北海道

	建　築　名	所　在　地	建築年	構造概要	設　計　者	施　工　者	備　　考	
01001	函館市立博物館第一号館（旧開拓使博物館）	函館市青柳町17函館公園内	M11.7	木1	開拓使函館支庁	田中善蔵	M12.5，開場，S38 道有形文化財，川嶋竜司『はこだての文化財』	○
01002	〃　第二号館（旧函館県博物館）	〃　〃　〃　〃	M16	木1	函館県	浜谷新助	M17 開場。S38 道有形文化財，川嶋竜司前掲書	○
01003	白川橋	〃　〃　〃　〃	M12	石			川嶋竜司前掲書	○
01004	函館市立図書館書庫	〃　〃　〃　〃	T5	RC5	辰野葛西建築事務所	村木甚三郎	川嶋竜司前掲書	○
01005	函館市立図書館	〃　〃　〃　〃	S2	RC2	函館市建築課		S3.7.17 開館式，半地階付	
01006	函館市立青柳小学校（旧青柳尋常高等小学校）	〃　〃　22	S11.10	RC3	函館市建築課	森川組		○
01007	函館市公民館（旧函館市青年会館）	〃　〃　12	S8.10.31	RC2	公募・函館市建築課	瀬崎組	〔建築雑誌 585〕	○
01008	旧函館麦酒会社醸造所	〃　谷地頭町	M31	煉1・木1			川嶋竜司前掲書	
01009	旧函館要塞	〃　元町函館山	M29～30頃	煉地下1	陸軍省	大倉組		○
01010	函館水道管理事務所（旧配水池番人詰所）	〃　〃　1	M22.12	煉1			川嶋竜司前掲書	○
01011	大谷派本願寺函館別院本堂	〃　〃　16	T4.11	RC1	伊藤平右衛門（9世）	同左10世・木田保造	遠藤明久〔大会梗概集　S53〕川嶋竜司前掲書	○
01012	〃　表門	〃　〃　〃	T5	RC1	〃	〃		○
01013	渡辺邸（旧亀井邸）	〃　〃　15-18	T8頃	木2	関根要太郎			○
01014	函館天主公教会堂	〃　〃　15	M41頃	煉1			T10 内部焼失，T13 修理，鐘楼新設RC，川嶋竜司前掲書	○
01015	小久保他住宅（旧藤野社宅）	〃　〃　17-19	M41	木2			越野武〔北海道支部研報49〕	
01016	函館ハリストス正教会復活聖堂	〃　〃　3	T5.10.15	煉1	河村伊蔵	尾林利吉	成聖式，川嶋竜司前掲書	○
01017	遺愛幼稚園	〃　〃　4	T2.9.29	木2			献堂式	○
01018	北海道函館西高等学校（旧庁立函館高等女学校）	〃　〃　7	S2.10.20	RC3	北海道庁			
01019	函館市公会堂（旧函館区公会堂）	〃　〃　11	M43.6	木2	小西朝次郎	村木甚三郎	M43.9.20 開業式，S49，重要文化財，川嶋竜司前掲書	○
01020	市所有建物（旧開拓使函館支庁書庫）	〃　〃　12	M13	煉1	開拓使函館支庁		開拓使茂辺地煉化石製造所煉瓦使用，川嶋竜司前掲書	○
01021	市所有建物（旧北海道庁函館支庁庁舎）	〃　〃　〃	M42.10.4	木2	宗田技師	鈴木仙蔵	T11 渡嶋支庁と改称，保存の意向，川嶋竜司前掲書	○
01022	市立函館病院高等看護学院清純寮（旧英国領事館）	〃　〃　33	M42.10	煉2	英人　キーツ？	新庄幸次郎	地階1，保存の意向，川嶋竜司前掲書	○

函館ハリストス聖堂

函館市公会堂

リストの例；日本建築学会編『日本近代建築総覧（新版）』1983年

(1)日本近代建築総覧

④『日本近代建築総覧』刊行後の批判：

ⅰ)悉皆調査の有効性：密度の異なる「悉皆調査」⇒サンプル調査

建築評論家佐々木宏（20101013シンポジウムでの会場からの発言）：

私の出身小学校が載っていない。「総覧」していないではないか。

⇒『総覧』によって一点名物主義から脱却できた（西澤）

ⅱ)記載事項の不正確：人の記憶に依拠した情報の多さ

←文献調査が不十分＋文献に載らない情報の確認手法未確立

ⅲ)現存建物に依拠した「歴史」の構築：現存建築物の「総覧」

→「『総覧』に基づいた位置づけが可能」（2009年日本建築学会大会建築歴史・意匠分野研究協議会「歴史的建築リストの可能性―学会・行政・市民との連携に向けて」某パネリストの発言）

→誤解を生む発言

「総覧」に基づいた建築史の構築は学術的に誤り

⑤『日本近代建築総覧』刊行後の評価：

ⅰ)保存・再生への貢献：指定文化財の増加

ⅱ)研究の広がり：研究対象の広がり＋研究手法の変化

(1)日本近代建築総覧

⑥『新版日本近代建築総覧』(1983)＋「追補」(1998)の刊行:
批判を受け止め情報の更新＋保存・再生への貢献を示す

また，この書の刊行に際し各地の関係者から多数のお手紙や記載内容の誤りについて御指摘を頂き感謝にたえない。これは対象建物が膨大であり，初めての調査であって一部で調査が行いにくい点があったことや，詳しい調査が行き届かなかったことによるが，今回のご指摘の点については早速これを改め，不幸にして取り壊された建物はその旨を表示し，全面的な見直しを行った。

新訂に当っては全国各地の研究者に一層の御努力をお願いいたし，新しく発見されたものは約1,000件にのぼっている。

近代建築の保存は，いろいろな理由によって困難な場合が多いが，日本の近代化の生きた証人であり，都市の人間的な環境の見直しのなかで，重要な歴史的環境，景観としての位置付けが新たになされつつある。

この新版総覧が各地に遺る近代建築を見つめ直すうえで役立つことが期待されるのである。

坂本勝比古「新版の刊行に当って」
(『新版日本近代建築総覧』1983年)

ⅰ)情報の更新:
記載内容の誤り
取り壊し情報
新物件

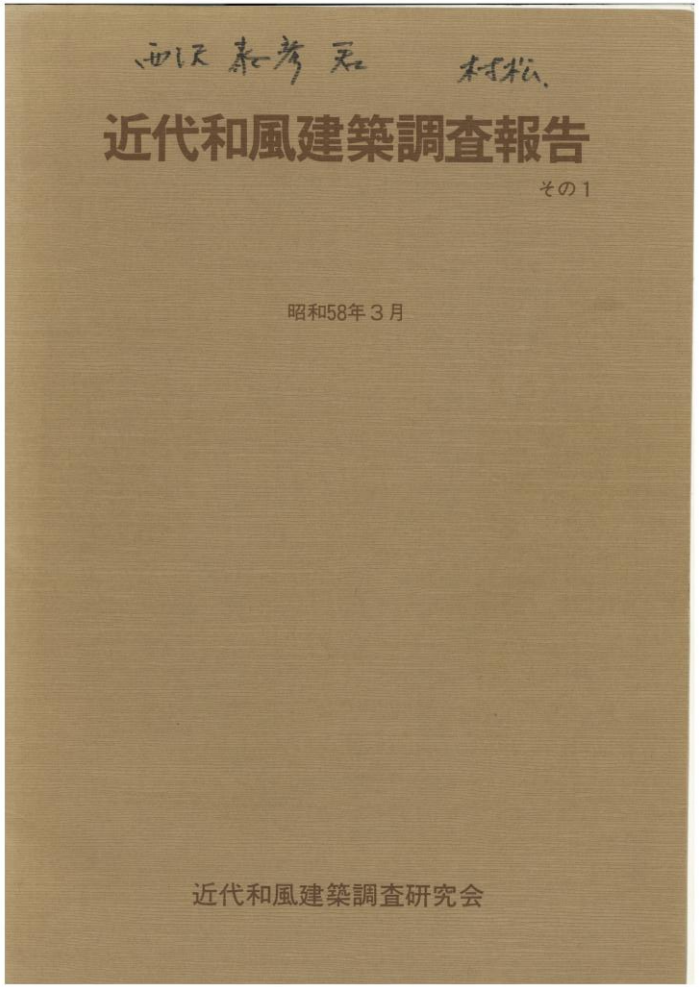
ⅱ)保存・再生への貢献
近代化の生き証人
歴史的環境・景観

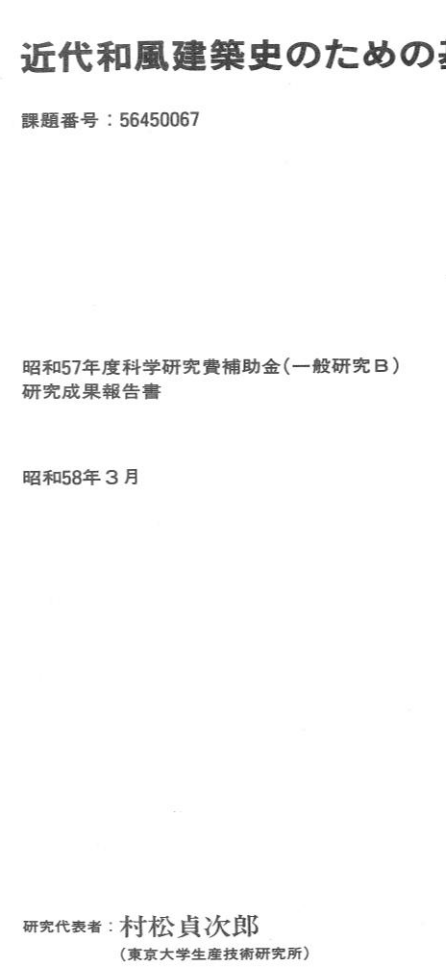
(2) 日本近代建築総覧の影響

①新たな調査の展開

『近代和風建築調査報告書(1)(2)』(1982・1985)

『中国近代建築総覧』(1988-93):研究対象の広がり＋手法の輸出





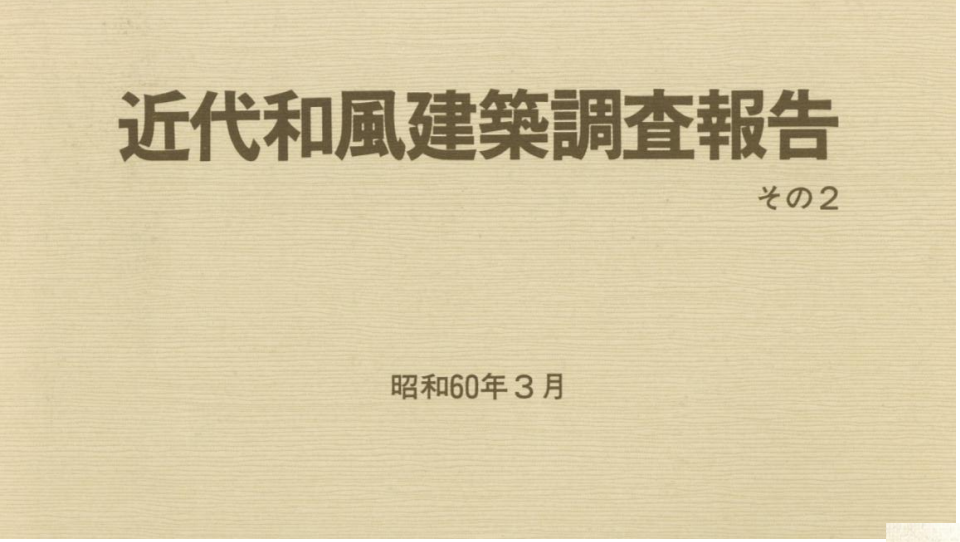
近代和風建築研究会編

『近代和風建築調査報告』その1

(1983年3月)

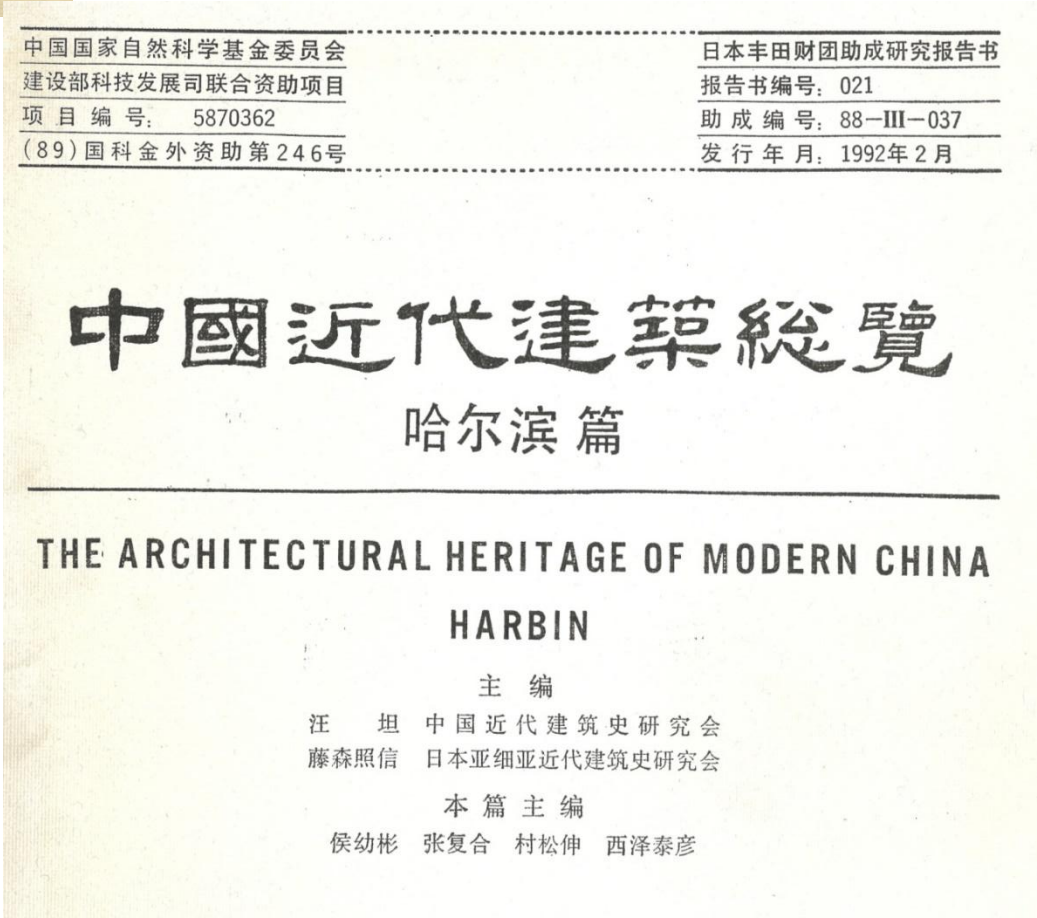
表紙(左)

中表紙(右):科研報告書



近代和風建築研究会編
『近代和風建築調査報告その2』
（1985年3月）

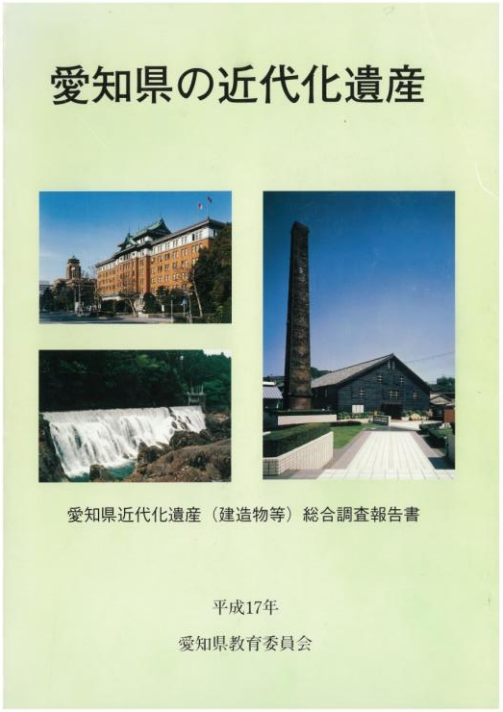
悉皆調査
⇒掲載物件選択
⇒文字情報＋写真

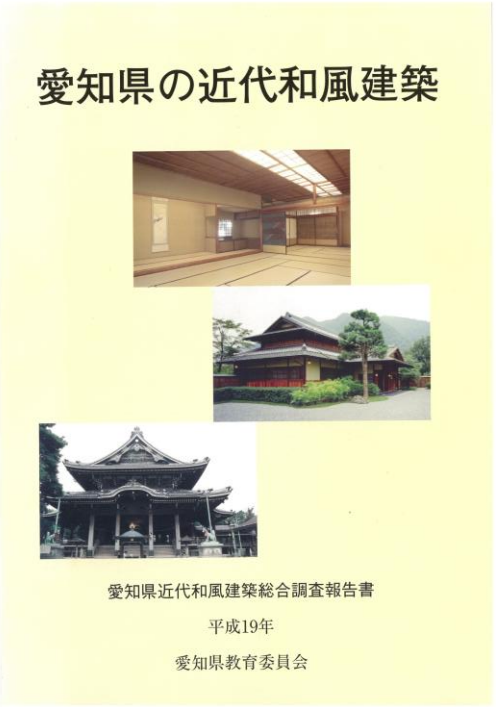


中国近代建築研究会・
日本アジア近代建築研究会編
『中国近代建築総覧・哈爾濱編』
（1992年）

(2)日本近代建築総覧の影響

「近代和風建築調査」「近代化遺産調査」の全国的実施：
ⅰ)「近代和風建築調査」：『総覧』除外を対象⇒「近代和風」の概念？
ⅱ)調査手法の継承と発展：三段階調査＋写真。図面情報の重視





左
愛知県教育委員会編
『愛知県の近代化遺産』
2003年

右
愛知県教育委員会編
『愛知県の近代和風建築』
2005年

問題発生(6)
失われた議論⇒「近代建築」の概念に関する議論が継続せず
⇒「近代和風建築」でも同じ経過

(2)日本近代建築総覧の影響

②波及効果

ⅰ)保存活動の拠り所

a) ○印の効力:「ラブレター」作戦

b) 掲載による社会的認知

ⅱ)登録文化財制度への波及:掲載物件は登録候補

静岡市役所本館
1934年竣工、1996年登録

亀城小学校
1927年竣工、1999年登録

豊橋市公会堂
1931年竣工、1999年登録

(2)日本近代建築総覧の影響

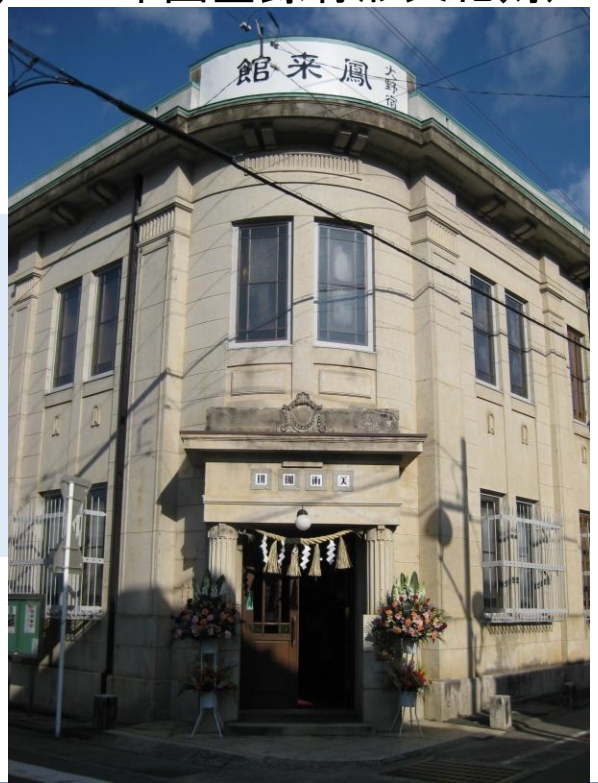
iii)研究対象・姿勢の変化:
一点名物主義からの脱却→悉皆調査による相対化と総体化
a) 相対化:悉皆調査により事例増加→多数の事例の比較が可能
b) 総体化;全体像を語る可能性

悉皆調査手法の成果事例(その1)

木曽川町役場倉庫:躯体RC造、木造小屋、外観土蔵
(現木曽川資料館収蔵庫、1924頃、2006国登録)

RC造躯体＋木造屋根
⇒愛知県で多数あり
1920年代後半から
1930年代半ばに集中
⇒過渡期のRC造

旧大野銀行本店:RC外壁、木造小屋
(1925年、2009年国登録有形文化財)



悉皆調査手法の成果事例(その2)

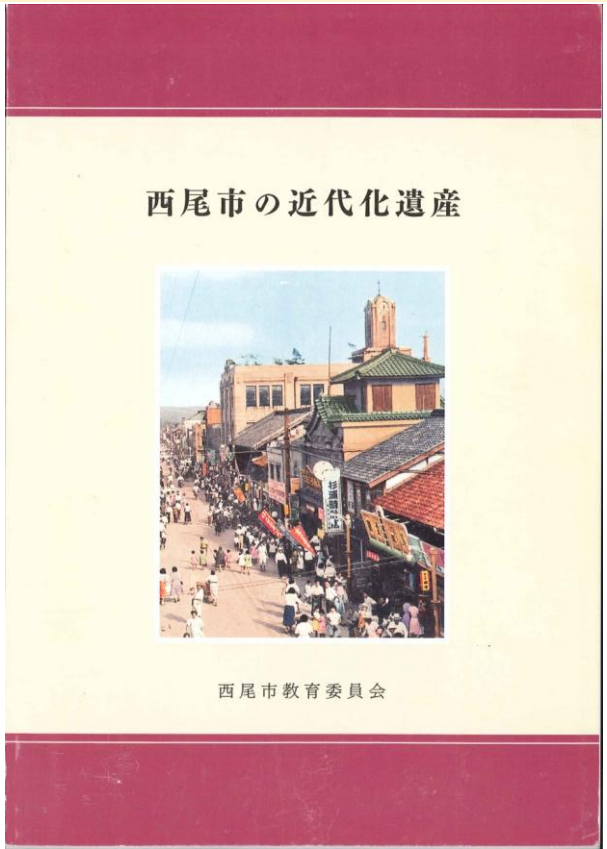
RC造大仏:技術発展の象徴

常福寺大仏(おおぼとけ、西尾市、1928年)

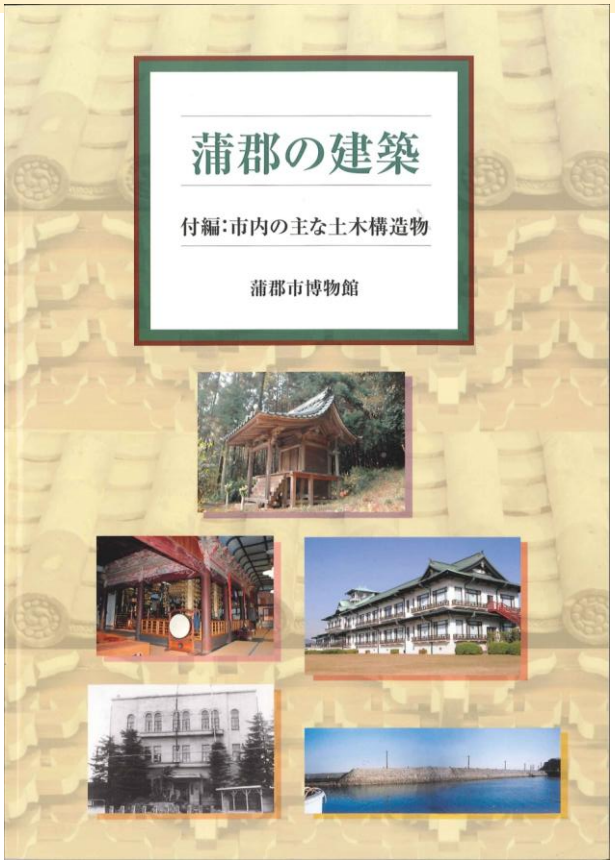
刈宿・閻魔大王とそれを守る鬼(西尾市)

(2)日本近代建築総覧の影響

ⅳ)文献調査の重要性を再認識:
　現存建物だけでは不明な部分の存在を再認識
　→文献調査＋遺構調査＋聞き取り調査の組み合わせ
　→正確なリスト作成
ⅴ)『総覧』＋「近代化遺産調査」⇒地方都市での成果還元



西尾市教育委員会
『西尾市の近代建築』
2006年



蒲郡市博物館
『蒲郡の建築』
2009年

旧大野銀行本店(1925年、2009年国登録有形文化財)
金融機関統廃合により取り壊しの危機、篤志家が買い取りカフェ転用
→登録有形文化財(2009)
ⅰ)客観的評価：混構造(RC壁＋木造床・小屋)⇒不燃化の手法
ⅱ)主観的評価：地域の顔

1998年撮影
天井の漆喰が落下

飯田線・三河大野駅前の看板

登録文化財記念式典
（2009.01.29）

東海道吉田宿から分岐し、
奥三河へつながる別所街道の大野宿

例2：甘強みりん社屋(蟹江町、1938年竣工、2005年登録)

客観的評価：
1)RC造＋コアを持つ平面
　⇒ミニ・オフィスビル
　　蟹江町最初のRC造
2)「復興式」外観
　⇒簡略化したルネサンス様式
3)川べりに立地
　⇒蟹江町の中心地を示す
主観的評価：
1)蟹江町のシンボル
2)川面に映える光景

展望機能を備えた屋上とそこからの眺め

2008年撮影→2014年撮影

「建物を褒めていただいたので使い続けます」（社長談、2014年）
（2012年本社屋として復活）

例3　校舎をめぐる新たな動き

これも「総覧効果」

校舎への愛着・記憶を大切にする動き

iii）旧長井小学校第一校舎：1933年竣工の校舎を2019年に地域施設に転用。2009年国登録有形文化財。

⇒1階にフリースペース、21時30分まで開放。

⇒2階にレンタルオフィス

⇒建物背面に現在の長井小学校校舎あり→小学校も旧校舎利

左：正面玄関　中：1階廊下　右：フリースペース

(3)中国近代建築総覧

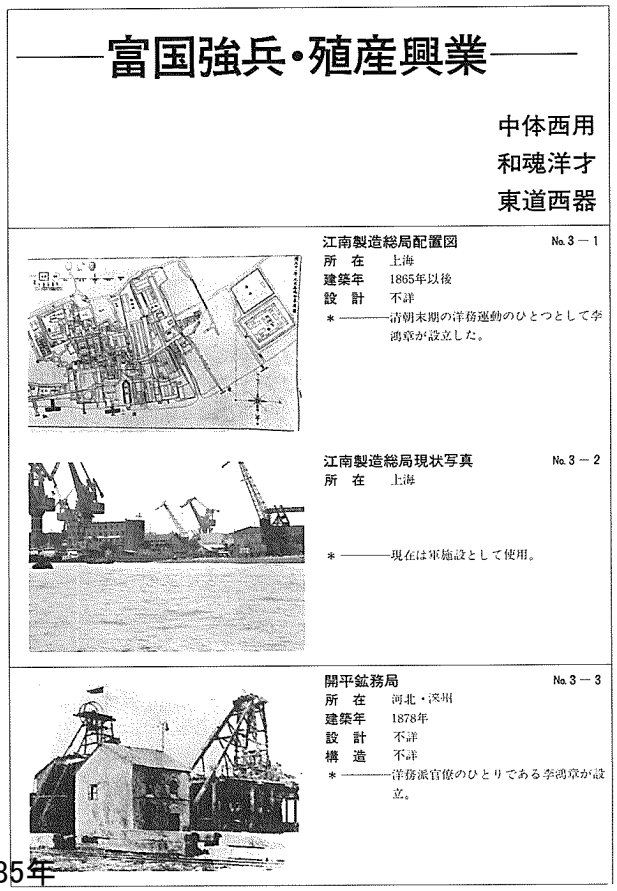
①『中国近代建築総覧』編集の経緯

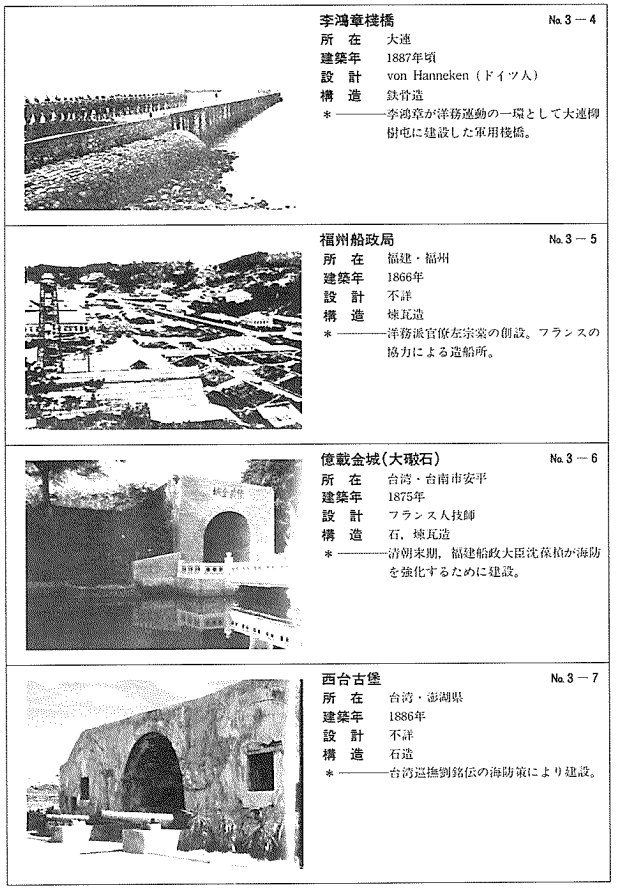
ｉ)シンポジウム「東アジアの近代建築」(1985年、東京)

a)韓国・台湾・中国から研究者招聘＋研究発表→日中交流開始

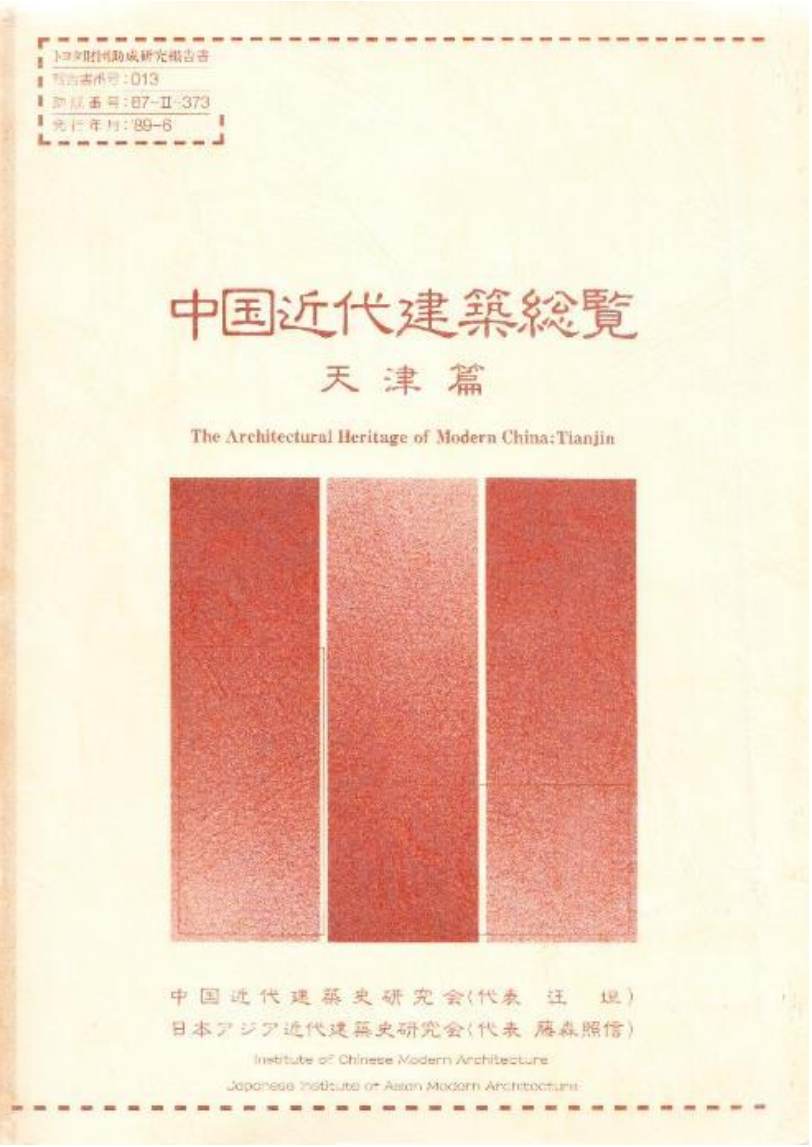
b)『東アジアの近代建築』(論文集＋図録＋年表)刊行→比較研究

村松伸・西澤泰彦編『東アジアの近代建築』1985年





(3)中国近代建築総覧

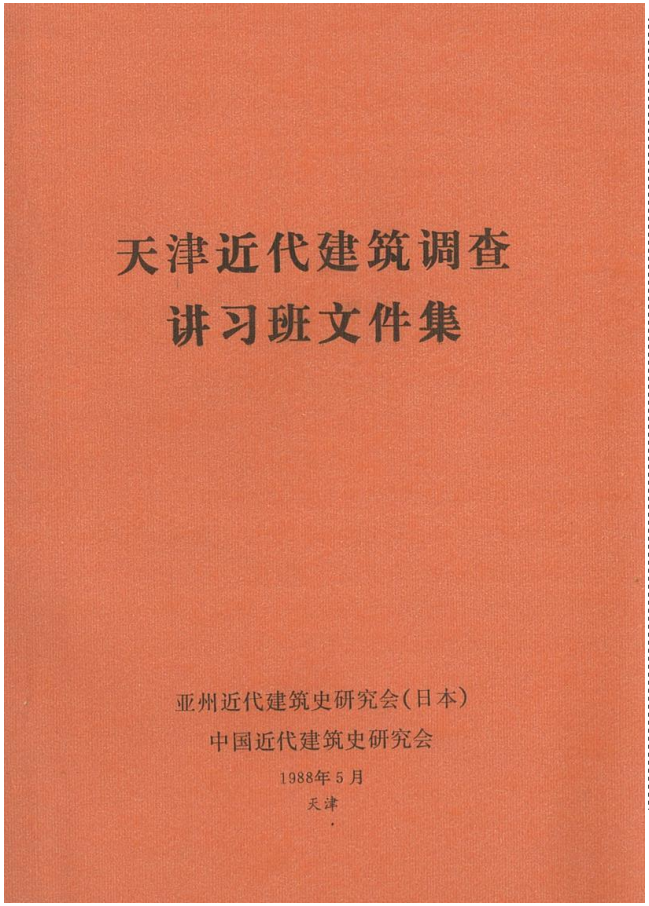


中国近代建築史研究会・日本アジア近代建築史研究会
『中国近代建築総覧天津編』1989年

①『中国近代建築総覧』編集の経緯

1985年11月シンポジウム
「東アジアの近代建築」(東京)
1986年10月中国近代建築史研究討論会(北京)
1988年2月中国近代建築共同調査協定書締結
(汪坦・藤森照信、東京)
1)中国16都市の調査(3ヶ年)⇒実際は14都市
モデルケースとして天津
2)各都市ごとに『中国近代建築総覧』作成
3)天津で調査研修を兼ねたワークショップ開催

同時に天津近代建築共同調査協定書締結
(周租爽・藤森照信、東京)
1)調査区域:旧城内と旧租界を中心
2)日中相互に文献調査実施、資料提供。
3)調査表作成:300件。建物情報と文献を記載、
写真を添付。
4)典型例を3棟実測調査
5)概説論文:日中双方で概説論文執筆



《天津近代建筑调查讲学班
文件集》【1988】

近代建築調査手冊

亜細亜近代建築史研究会（日本）編・1988年05月07日第一版

一．調査方法概要

1.準備比例尺較大的地図。

2.首先要対調査地区的近代建築状況有一个整体的印象。根据地図沿所有街道歩行観察，把較重要的建築物標出。辺看辺記。此時最好不要拍照，以免忽略全局。

3.注意収集較重要建築物的有関現場資料。

①在地図上標出位置，進行編号。如地図的比例尺不夠大，応局部放大。

②拍摄照片。

③現場写生（外観）。

④記録建築物的名称，地址，使用単位。如有可能応進行訪問，作記録。

4.当天晩上応把白天調査的内容及時進行整理，包括観察到的、訪問的以及自己的推断等。

5.調査資料的整理：可以依据建築物的建成年代、様式等為線索対所調査地区的資料進行分類、編目，並以此対該地区近代建築的発展変化進行分析。

二．調査対象的選擇

《中国近代建筑调查手册》（部分）【1988】

2）1988年5月天津ワークショップ開催

中国各地から大学院生、助手、講師（若手教員）を招へい

⇒講義＋市街地調査＋実測調査を体験（4泊5日）

天津近代建築講習班正式学員名単

（共２２名）

1987天津WS参加者のうち8名はその後、各地での中国近代建築総覧編集のための調査に参加。

第一組（６人，東局子単層建築実測）

荊子洋:
天津大学教授

組長：荊子洋（天津大学建築系助教）
組員：高咏梅（女，清華大学建築系畢業班学生）
于亜峰（哈尔濱建工学院建築系研究生）
方擁（泉州華僑大学建築系講師）
范尭（重慶建工学院建築系研究生）
王時原（大連工学院建築系）

方擁:華僑大学
／北京大学教授

王時原:
大連理工大学教授

→ 1988-89ハルビン近代建築調査

→ 1990-91大連近代建築調査

第二組（８人，法租界領事館建築実測）

劉松茯:
ハルビン工業大学教授

組長：祖万安（天津大学建築系研究生）
組員：劉松茯（哈尔濱建工学院建築系助教，在職研究生）
黄俊（盧山管理局建設処）
楊維菊（女，南京工学院建築系講師）
馮子松（清華大学建築系畢業班学生）
謝少明（広州市設計院助工）
李傳義（武漢大学建築設計室建築師）
韓立（女，大連工学院建築系）

楊維菊:
東南大学教授

謝少明:
華僑大学教授

→ 1988-89ハルビン近代建築調査

→ 1988-89南京近代建築調査

→ 1988-89広州近代建築調査

→ 1988-89武漢近代建築調査

第三組（８人，法租界両層建築実測）

組長 王蔚（天津大学建築系助教，在職研究生）

王蔚:天津大学教授

組員 史津（南京工学院建築系研究生）
呉耀東（清華大学建築系研究生）
楊帆（重慶建工学院建築系助工）
王莉恵（女，哈尔濱建工学院建築系研究生）
~~戚勇（長春市城郷規劃設計研究院）~~
魏栄博（済南山東省規劃院）
~~（武漢市房地産管理局）~~

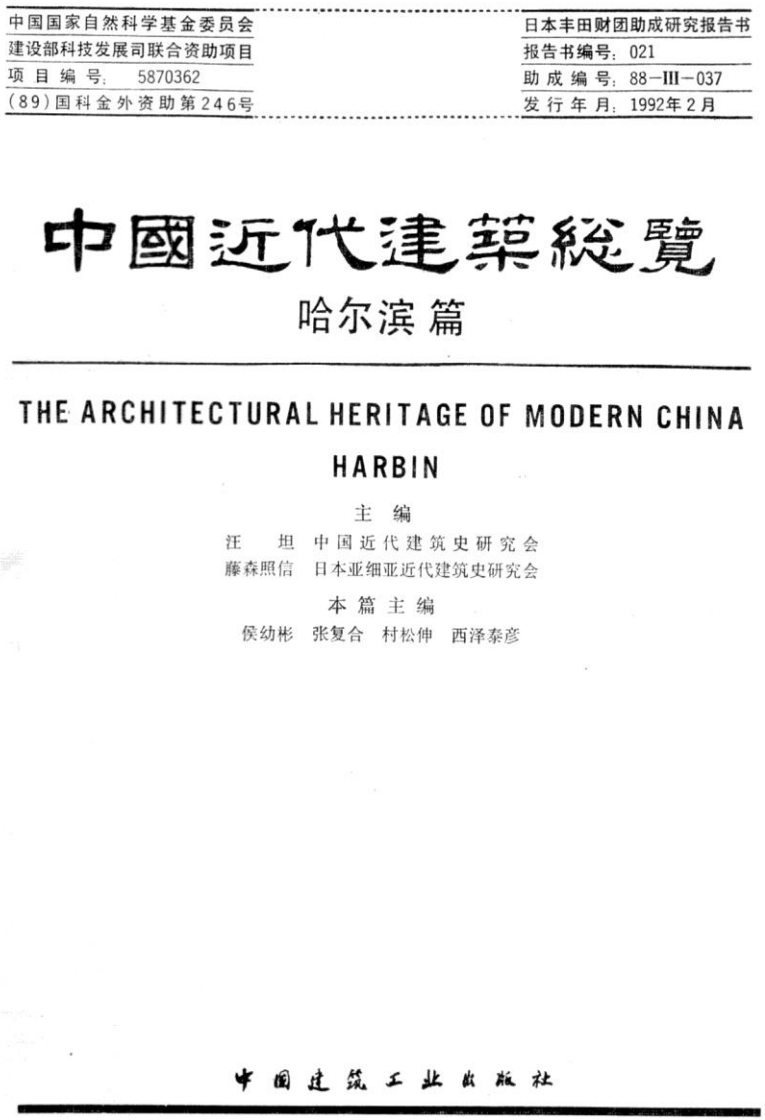
呉耀東:
清華大学教授

→ 1990-91北京近代建築調査

→ 1988-89ハルビン近代建築調査

8名は大学教員として教育に携わる

(3)中国近代建築総覧



『中国近代建築総覧哈爾濱編』(1993年)

②1988年10月中国近代建築調査(第二期)の協定書締結
ハルビン・青島・武漢・南京・アモイ・広州
(各都市の大学教員と藤森照信が署名、北京)
1988年10月各都市にて調査開始
1989年4-5月現地にて調査進行状況確認
1989年9月調査終了予定⇒天安門事件で変更

調査協定書骨子
1)調査区域:概ね各都市の旧市街地
2)日中相互に文献調査実施、資料提供。
3)調査表作成:建物情報と文献を記載、 写真を添付。枚数は都市の規模に応じて3段階
ハルビン・南京・武漢・広州:180件
青島・アモイ:150件 煙台:120件
4)典型例を3棟実測調査
5)概説論文:日中双方で概説論文執筆

(3)中国近代建築総覧

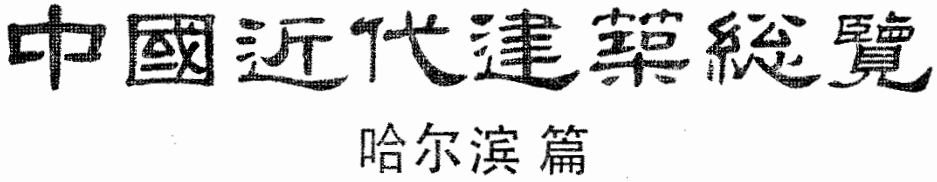
③ハルビン調査の経過〔その1〕

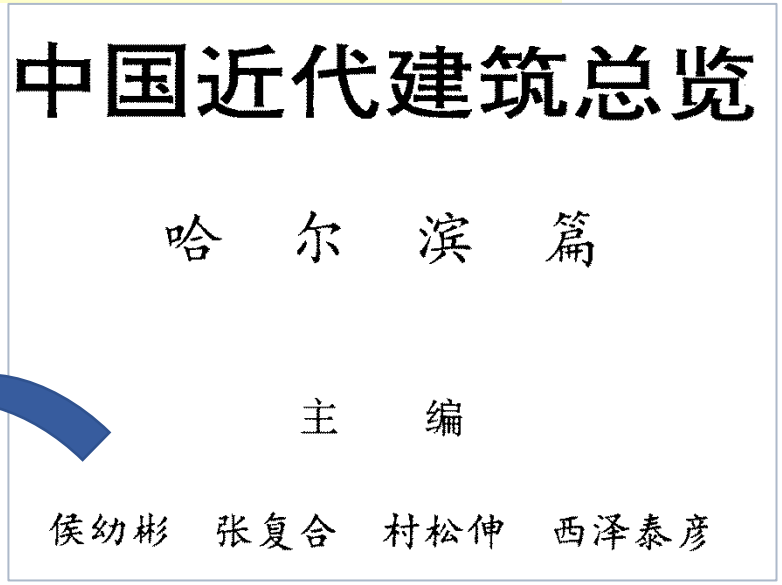
ⅰ)調査主体と調査費:日中共同≒相互互恵≒平等⇒双方の利益
当時多かった「視察」の排除

中国国家自然科学基金委員会の助成

トヨタ財団の助成

⇒ 中国での近代建築研究の認知
相互主義による共同研究



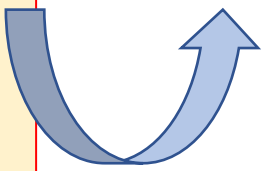


侯幼彬:ハルビン建築工程学院教授〔現地代表→実務者:劉松茯(助手・現教授)〕
張復合:清華大学講師→教授→1990年代～2015年中国近代建築史研究を主導(2017退職)
村松伸:東京大学助手→教授→mAAN (modern Architecture Asian Network)結成(2020退職)
西澤泰彦:東京大学大学院学生(清華大学留学・北京滞在)

(3)中国近代建築総覧

ii)体系的総合的調査研究手法の提示
a)文献調査:日中間で情報共有⇒目録掲載
中国:城市档案館・房産土地管理局所蔵資料
＋既往研究確認
日本:日本＋海外資料調査
b)遺構調査:悉皆調査
市街地中心に歩いて現存建築物確認
現地担当者＋日本側研究者の共同作業
建物情報(建物名称・所在地・建築年
・設計者・施工者など)収集
⇒リスト作成＋所在地明示地図作成
＋重要物件の実測調査
c)聞き取り調査:
文献調査で不明な部分を補足→困難
→特徴と編年の記述

iii)総覧掲載情報
調査概要・論文
物件リスト
物件所在地図
調査表
実測調査報告
文献目録



(3)中国近代建築総覧

⑤ハルビン調査の経過〔その2〕

ⅰ)予定:

開始:1988年10月協定調印⇒ハルビンは180棟を目安

打ち合わせ:1989年4～5月／9月の2回予定

終了:1989年9月頃

ⅱ)実際の進行状況

1988年10月－1989年4月:悉皆調査順調＋実測物件候補確定

1989年5月:第1回打ち合わせ:調査物件確定＋実測物件確定

＋報告・論文議論⇒2本(年代・用途＋様式・構造)

→アール・ヌーヴォー＋中華バロックに特に注目

(3)中国近代建築総覧

⑤ハルビン調査の経過〔その2〕

ⅱ)実際の進行状況

1989年5月:第1回打ち合わせ:調査物件確定＋実測物件確定
＋報告・論文議論⇒2本(年代・用途＋様式・構造)
→アール・ヌーヴォー＋中華バロックに特に注目

1989年6月:調査中断〔大学混乱〕←天安門事件
⇒調査期間1年延長

1989年7月:ハルビンで実測調査

(3)中国近代建築総覧の場合

⑥調査内容の確認〔その1〕

ⅰ)1989年9月:第2回打ち合わせ

調査表確認:213枚全部確認

文献情報交換:日本側情報を提供

←天安門事件

中国近代建筑调查表

地区名	哈尔滨	编号	071008

建筑物现在名称	马迭尔宾馆
原有名称	МОДЕРН ОТЕЛЬ, MODERN HOTEL 马迭尔旅馆
地址	道里区 中央大街 129 号
建筑物用途	(现在) 宾馆 (原来) 旅馆
结构	1.木 2.钢结构 3.R.C. 4.砖木 5.砖石 6.石结构 7.其他(砖混)
现在使用者	马迭尔宾馆 / 规模 / 地上三层; 地下一层
房产所属单位	马迭尔宾馆 / 电话
设计年月日	/ 始建·竣工年月日 / 1913年竣工开业
设计单位·人	/ 有关建筑物的原始资料 / 有 图纸✓ 照片✓
施工单位·人	/ / 无 施工记录

建筑物特征(形式·结构·材料等)

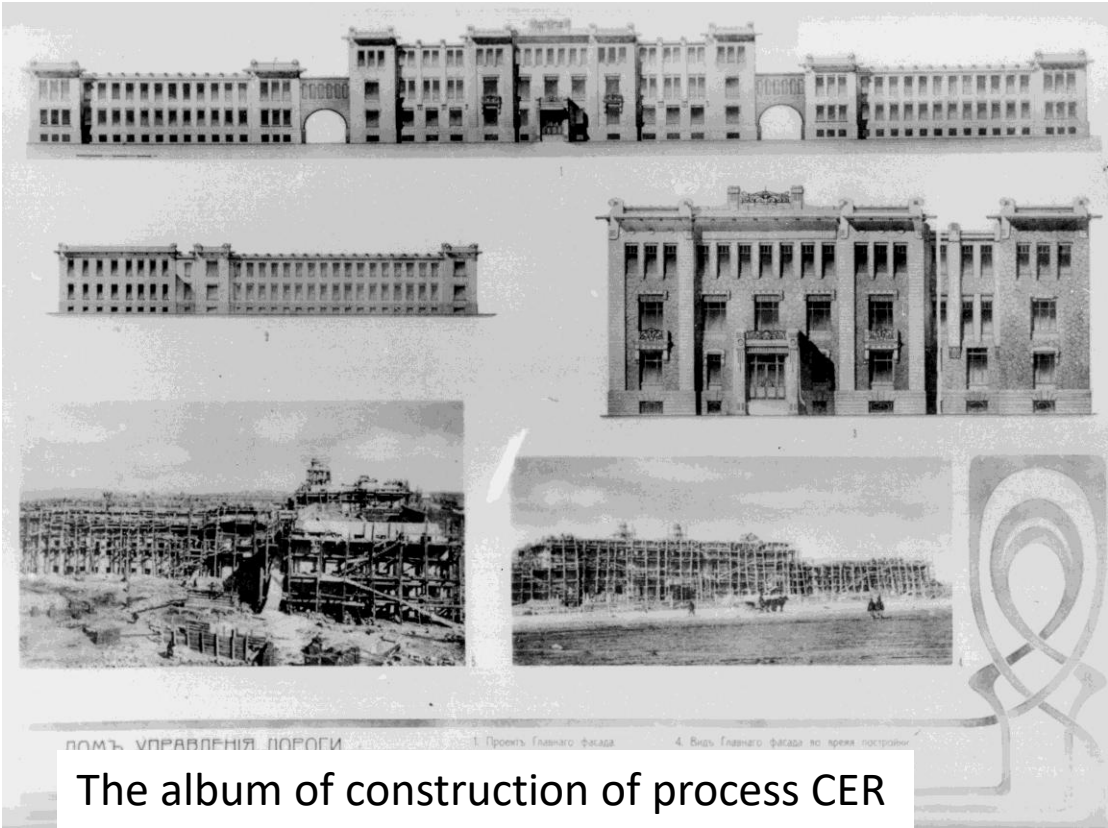
哈尔滨近代的著名宾馆,没有高级客房,大小台际,冷饮厅,平台,附场等,主面为三层,部分带有四层面前或阁楼层,底层为基座层,墙面台里块石,层大尺度路地面,三层用通高壁柱,三层用半圆穹窗,檐部,女儿墙与阳台栏干都突出地运用了新艺术运动的曲线和装饰,建筑风格带有法国新艺术运动的特征。现列为哈尔滨第三类保护建筑。

备注(原始资料所藏者·原有屋主·屋主变动经过等)

原房主是纳罗·开勒普,原为俄籍犹太人,后入法籍,解放后至今仍为马迭尔宾馆。原图纸收藏于马迭尔宾馆房产科。

《哈尔滨历史编年》P.48 指出建成开业年代

调查人	刘松茯	调查日期	1989.4



The album of construction of process CER

⑦中国近代建築調査表（ハルビン）での問題〔その1〕

中国近代建筑调查表

地区名	哈尔滨	编号	071008

建筑物现在名称	马迭尔宾馆		
原有名称	МОДЕРН ОТЕЛЬ，MODERN HOTEL 马迭尔旅馆		
地址	道里 区 中央大 街 129 号		
建筑物用途	（现在）宾馆 （原来）旅馆		
结构	1.木 2.钢结构 3.R.C. 4.砖木 5.砖石 6.石结构 7.其他（砖混）		
现在使用者	马迭尔宾馆	规模	地上三层；地下一层
房产所属单位	马迭尔宾馆	电话	
设计年月日		始建·竣工年月日	1913年竣工开业
设计单位·人		有关建筑物的原始资料	有 图纸√ 照片√
施工单位·人			无 施工记录

建筑物特征（形式·结构·材料等）

哈尔滨近代的著名宾馆，设有高级客房、大小台球、冷饮厅、茶厅、剧场等。主面为三层，都为带有四坡重檐或闻楼层房屋为基座层，墙面仿重块石，辟大尺度整地面。三层用通高壁柱，三层用半圆额窗，檐部、女儿墙与阳台栏干都体现出地区用了新艺术运动的曲线和装饰，建筑风格带有法国新艺术运动的特征。现列为哈尔滨第三类保护性建筑。

备注（原始资料所藏者·原有屋主·屋主变动经过等）

原房主是约瑟·开勒普，原为俄籍犹太人，后入法籍，解放后至今仍为马迭尔宾馆。原图纸收藏于马迭尔宾馆客房科。

《哈尔滨历史编年》P.48 提供馆址开业年代

调查人	刘松茯	调查日期	1989.4

照片（四寸）

ⅰ）旧名称（竣工時）の確認
⇒原語表記優先
ⅱ）構造表記の確認
⇒磚木／磚混
ⅲ）情報根拠明示
ⅳ）写真貼付

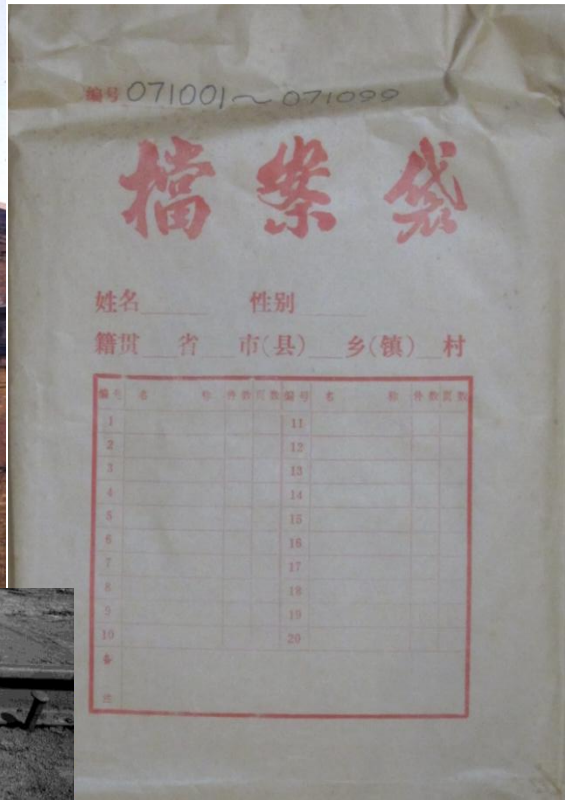
(3)中国近代建築総覧

⑧調査内容の確認〔その2〕と編集

ⅰ)1990年5月：第3回打ち合わせ＋物件確認
成果物(調査表など)受け取り→北京→東京(1990.7)

ⅱ)1991年9-12月：『中国近代建築総覧ハルビン編』編集

ⅲ)1992年2月：『中国近代建築総覧ハルビン編』発行

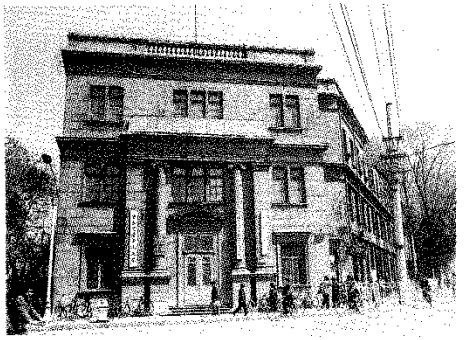


『中国近代建築ハルビン編』

ハルビン近代建築概説:侯幼彬＋劉松茯
ハルビン近代建築の特色:西澤泰彦
実測報告:劉松茯
ハルビン近代建築分布図(下図)
ハルビン近代建築調査表(右図)
ハルビン近代建築資料目録

哈尔滨近代建筑调查表

编　　号	151001
建筑物现在名称	哈尔滨市老年人大学
原有名称	哈尔滨万国储蓄会　Inter-National Savings Society
建筑物用途	(现在)办公楼　(原来)银行
地　　址	道里区中央大街1号
结　　构	砖混
规　　模	地上3层　地下　层
设计年月日	1925年　竣工年月日:1925年始建
设计单位・人	不详
施工单位・人	不详
出　　处	哈尔滨市房地管理局藏原始图纸
备　　注	50年代文化局舞蹈学校　60年代文化局办公楼哈尔滨市Ⅱ类保护建筑



哈尔滨近代建筑概说

侯幼彬　刘松茯

体系化·
編年化

哈尔滨位于松花江中游，松嫩平原的东南缘，靠近北纬 46°，是中国气候最寒冷的大城市。

哈尔滨地区有悠久的文化历史，这一带曾发现旧石器时代晚期的遗址[①]。春秋战国时期，这里已有肃慎人居住[②]。8 世纪属唐朝所设忽汗州的辖区[③]。10 世纪 30 年代，女真人在这里建立阿勒锦村[④]。12 世纪初，肃慎后裔金人在哈尔滨东南 28km 的阿城县白城子建立都城上京会宁府。13 世纪，哈尔滨成为元朝的北方驿站。17 世纪属满洲宁古塔将军的辖地。到 19 世纪末，哈尔滨地区形成香坊、傅家店、顾乡屯、松罗堡、白旗窝堡等村落[⑤]。

1896 年，沙俄强迫清政府签订《中俄密约》，取得了从满洲里到绥芬河的中东铁路修筑权。1897 年，沙俄通过签订《东省铁路公司续订合同》进一步取得哈尔滨至大连的南满洲支路的修筑权。1898 年，中东铁路建设工程总局由海参崴迁到哈尔滨，1901 年～1903 年，哈尔滨至满洲里、大连、绥芬河的三条铁路线相继建成。哈尔滨作为铁路的交汇枢纽和中东铁路局的驻在地，从 1898 年开始，迈出了近代城市的建设步伐[⑥]。到 1949 年中华人民共和国成立，在半个世纪中，哈尔滨迅速发展成为中国近代的一座很有特色的北方大城市。

一、哈尔滨近代建筑的发展阶段

在 1898～1949 年的 50 年间，哈尔滨的近代建筑活动，大体上可以分为四个阶段：

（一）奠定期（1898～1917）

这是哈尔滨城市和建筑基本格局的奠定阶段。1899 年，沙皇俄国以建立“黄色俄罗斯附属国”的构想，由中东铁路建筑工程局开始了哈尔滨的建城规划[⑦]。城区选择在北临松花江，南至马家沟的丘陵地带。三条铁路线在城区中呈丁字相交，把全城划分为若干区。规划选定地势最高的南岗（原名秦家岗，当时称为新市街，俄名НОВЫЙ ГОРОД）作为铁路行政区，建造了铁路系统的管理局大楼、火车站、路局旅

調查·
分析

哈尔滨近代建筑的特色

西泽泰彦

本文从下述四个方面论及哈尔滨近代建筑的特色：一、历史性；二、建筑样式；三、建筑结构与材料；四、哈尔滨近代建筑在中国及东亚近代建筑史上的地位。最后，述及其现状。

一、历　史　性

十九世纪末沙俄的对外政策，是哈尔滨发展成今天的近代城市的起因。当时，沙俄的对外政策是“寻求不冻港”的“南下政策”。作为其对外政策的重要一环是占有沿海州，建设海参崴军港，修建从海参崴到俄国境内的铁路（西伯利亚铁路）。正是在西伯利亚铁路建设过程中，哈尔滨作为俄国控制中国东北地区的根据地而建设起来。

沙俄当时以“铁路属地”的名义为借口，攫取了相当于现在哈尔滨市南岗区和道里区一带的行政权，并开始进行城市建设。在世界史上，这种所谓的“铁路属地”是中东铁路和南满铁路（满铁）这两个公司所特有的土地占有形式。

同中国其它城市相比，哈尔滨的历史很短，哈尔滨的建筑多从20世纪才开始建造，其历史至今尚不足百年。但作为以“铁路属地”这种特殊的土地占有形式而形成的城市，却使哈尔滨的历史独具特征。

二、建　筑　样　式

哈尔滨近代建筑的样式可分为以下八类：古典系、哥特系、拜占廷系、新艺术运动、装饰艺术及现代主义、中国系、西伯利亚系、伊斯兰系等。

（一）古典系

哈尔滨的古典系建筑各具不同风格，分别表现为文艺复兴式、巴洛克式，19世纪到20世纪的新古典主义及仿古典主义式的意匠。

文艺复兴式的例子，有哈尔滨万国储蓄会（151001）、协和银行（151007）、吉

(3)中国近代建築史総覧

⑨ハルビン調査で得たこと

ⅰ)新たな情報の確認:1920年代のアール・ヌーヴォー＋中華バロック

ⅱ)意見交換による結論:半世紀の間に多種多様な建築が出現

⇒アール・ヌーヴォー建築は一例

⇒西澤:アール・ヌーヴォー建築の位置付け(1990.10)

⇒『中国建築史』(第4版/2004)に引用/文化財指定

ⅲ)評価の視点の多様化:外観＋様式・意匠中心

⇒中央大街(旧キタイスカヤ)の建物評価

⇒建物の市街地における存在意義＋社会的役割

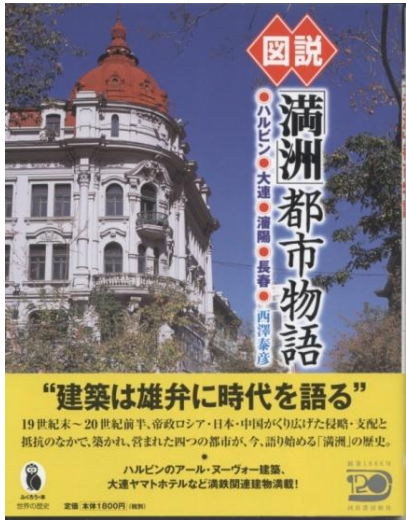
＋地域や国家の近代化との関係

⇒アール・ヌーヴォー/中華バロックの評価

⇒劉松茯:博士論文執筆＋刊行

西澤:「建物を褒める」

＋『図説「満洲」都市物語』など刊行



ⅳ)調査方法の確認:悉皆調査＋抽出調査

ⅴ)意思疎通の重要性:「あなたの話を全て聞きます」

『中国建築史』(第5版)
(中国建築工業出版社、2004年)
に記載されたアール·ヌーヴォーの評価
The evaluation of art nouveau architecture in Harbin written in the book "History of Chinese Architecture" published in 2004

第三节　现代建筑：多渠道起步

一、外国建筑师导入的"新建筑"和现代建筑

19世纪下半叶，欧洲兴起探求新建筑运动，80年代和90年代相继出现新艺术运动（Art Nouveau）和青年风格派（Jugendstil）等探求新建筑的学派。这些新学派力图跳出学院派折衷主义的窠臼，摆脱传统形式的束缚，是建筑走向现代净化过程的一个步骤。

这场运动传遍欧洲，并影响到美国。通过外国建筑师的中介，也渗透入近代中国。20世纪初在哈尔滨、青岛等附属地、租借地城市，开始出现了一批新艺术运动和少量青年风格派的建筑。

新艺术运动的建筑风格，以哈尔滨最为集中、显著。哈尔滨作为中东铁路的交汇枢纽和管理局驻在地，从1898年开始了城市建设和近代建筑活动。中东铁路系统的早期建筑都是在圣彼得堡的中东铁路规划总部进行方案设计的。这个设计部门的建筑师为哈尔滨的铁路系统建筑采用了当时最新潮的新艺术运动风格作为基调。因此，建于1901～1903年的哈尔滨火车站（图14-23），建于1902～1904年的哈尔滨中东铁路管理局大楼，以及同期或随后陆续建造的铁路旅馆、铁路技术学校、商务学校、铁路局级官员住宅（图12-1）、莫斯科商场、道里秋林公司等一大批建筑，都是新艺术运动风格的建筑。这些建筑都采用吻合功能的空间，较为简洁的体量，摈弃了西方古典柱式，好用流畅的曲线，展现出当时最新的建筑潮流。日本学者西泽泰彦曾著文指出哈尔滨新艺术运动建筑的若干特点：在类型上，不仅用于小型建筑，也用于公共性很强的大型建筑物；在材料上，多用木材而不是铸铁来做独特的新艺术运动式的曲线；在建造年代上，新艺术运动在西欧仅流行十几年，到1910年前后停止，而哈尔滨则延续到20年代后期，寿命长得多[1]。他说："哈尔滨新艺术运动建筑之集中，在世界上是独一无二的。如果我们称哈尔滨为'新艺术运动建筑城市'，她是当之无愧的"[1]。

哈尔滨新艺术运动建筑的这种情况表明，欧洲新建筑运动兴起之际，在近代中国就有所反映。但是，不论是哈尔滨新艺术运动建筑，或是青岛青年风格派建筑，在当时的中国，都没有形成多大的影响。当时的人们并没有意识到它的新潮价值，只把它当作洋式建筑的一种样式而已。

1925年，"装饰艺术"（Art decoratif）展在巴黎万国博览会举行，以此为契机，欧美各国开始流行装饰艺术样式。这种样式美国人称之为"Art-Deco"，是一种向国际式过渡的形式。它的主要特点是体形简洁、明快，好用阶梯形的体块组合，流线型的圆弧转角，横竖线条的墙面划分和几何图案的浮雕装饰。它传入美国后就成了美国商业建筑和摩天楼的流行式。装饰艺术风格很快也进入中国，首先出现在当时上海外国洋行所做的设计工程。如公和洋行设计的沙逊大厦（1926～1929年）（图12-21）、河滨公寓（1930～1933年）、都城饭店（1930～1934年）、汉弥尔登饭店（1931～1933年），英商业广地产公司建筑部设计的百老汇大厦（1930～1934年）（图12-5），邬达克设计的大光明电影院（1933年）（图12-24）、国际饭店（1931～1934年）（图14-24）等。沙逊大厦可以说是从商业古典转向装饰艺术的过渡期作品（图12-21）。这栋高10层，局部达13层的大厦，立面还留有欧美早期高层建筑的"三段式"痕迹，转角顶部高19米的方锥体屋顶，还带有商业古典的影子，但是它的标准层基本上是现代式的竖线条，装饰性的图案都集中在底层和顶层，已具有明显的"装饰艺术"的特征。百老汇大厦（图12-5）比沙逊大厦迈前一步，虽然局部也带有图案和线脚装饰，但整体外观已十分简洁，可以说是从装饰艺术走向了准国际式。国际饭店也是如此。这幢高24层的大厦，是当时全国最高的建筑，号称远东第一高楼。外观仿美国摩天楼样式，立面用褐色波纹面砖饰面，底部墙面饰黑色磨光花岗石。前部15层以上逐层内收，成阶梯状，整体呈现现代式楼身与装饰艺术式塔楼的整合。

作为一种摩登形式，装饰艺术在上海风行一时。像大光明电影院那样以板片横竖交织，突出大片玻璃体块的装饰艺术手法，已具有很浓的现代感。实际上，进入30年代后，现代建筑已陆续在上海涌现。如法商营造公司设计的毕卡地公寓（1934年）（图14-25），法商赖安洋行设计的雷米小学（1933年）、万国储蓄会公寓（1935年）、道斐南公寓（1935年），邬达克设计的吴同文宅（1937年）（图12-4）等，都是颇为地道的"国际式"建筑。同时期其它城市也有类似现象，如天津法商永和工程司设计的渤海大楼（1934～1936年）和利华大楼（1936～1938年）（图14-26）等。这些欧美建筑师设计的国际式建筑是现代建筑导入中国的一个重要渠道。

三四十年代，在东北日本占领区，还出现了一批由日本建筑师导入的现代建筑。这些建筑，一部分是日本本土的建筑师参与设计的，而大部分是当时设在东北地区的日本官方建筑机构和民间建筑事务所设计的。

在日本本土建筑师中，远藤新、土浦龟城、前川国男等几位在日本属于现代建筑先驱的人物，都曾做过东北地区的建筑设计[2]。远藤新曾在塔里埃森学习，是赖特的学生。30

[1] 西泽泰彦：《哈尔滨新艺术运动建筑的历史地位》，《第三次中国近代建筑史研究讨论会论文集》，中国建筑工业出版社1991年版，第7273页。

[2] 参看越泽明：《满洲都市计划史之研究》黄世孟译，国立台湾大学土木工程学研究所，1986年。

(4)中国近代建築総覧刊行後の影響

①建築史研究の進展
　ⅰ)近代建築史研究の進展　　ⅱ)建物に即した研究の進展
　ⅲ)研究者の交流拡大と研究者数の急増
　ⅳ)研究水準の向上　ⅴ)研究対象の拡大
　ⅵ)個別テーマによる学術集会の開催
②文化財指定の進展
　ⅰ)近代建築の評価に基く文化財指定
　ⅱ)一点名物主義からの脱却
③都市再生での活用
　ⅰ)指定文化財の積極的活用
　　ハルビン：Ⅰ類・Ⅱ類・Ⅲ類→Ⅲ類（外壁保存）の積極的活用
　ⅱ)指定制度の多様化：
　　瀋陽：不可移動文物
④想定外の展開：ブランド化
　ⅰ)21世紀の
　　アール・ヌーヴォー建築
　ⅱ)中華巴洛克
　　歴史文化保護街区

(4)中国近代建築総覧刊行の影響

①建築史研究の進展：ⅰ)近代建築史研究の進展　ⅱ)建物に即した研究の進展

具体例1)大学教科書『中国建築史』(第1版1979年)の変遷

第1版(1979)＋第2版(1983)：文革前の『中国建築史』に近代を加筆

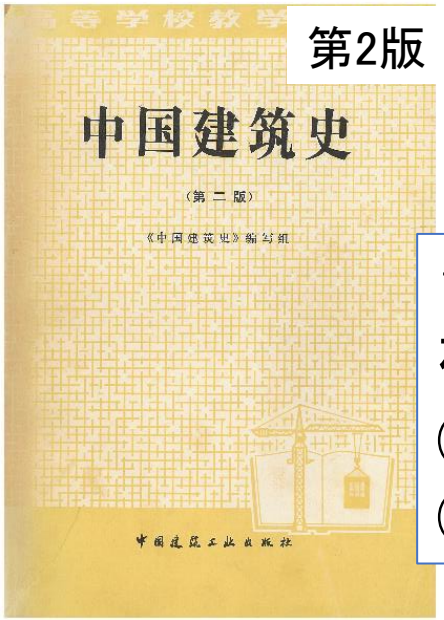
第一編中国古代建築：都市・宮殿・宗教・住宅・庭園・技術

第二編中国近代建築：都市・工業・住宅・公共・技術・思想・革命拠点

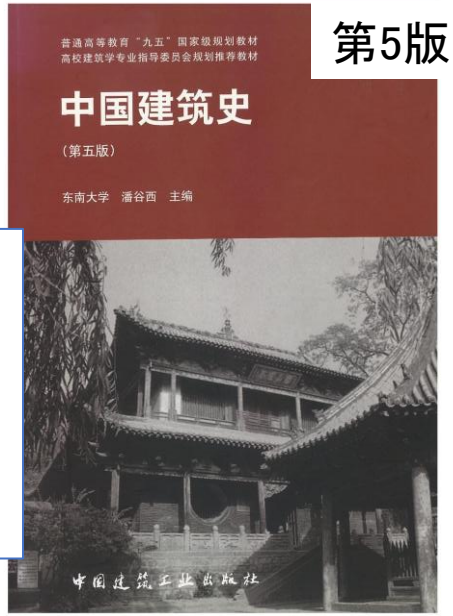
第4版(2000)＋第5版(2003)＋第6版(2009)：近代建築再編・現代追加

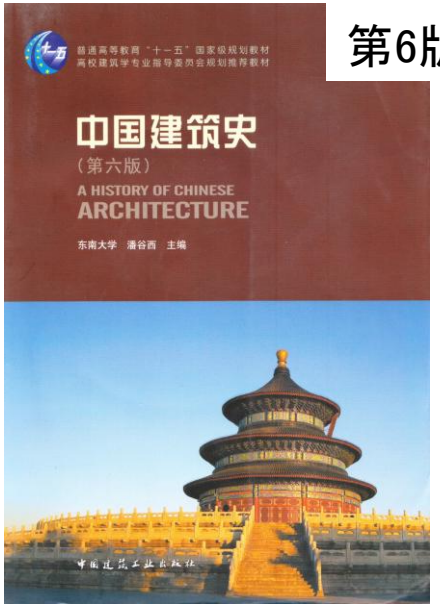
第一編古代建築＋第二編近代建築＋第三編現代建築

第二編：都市・類型と技術・制度と教育と設計組織・形式と思想



1986年以降の
研究成果反映
①体系化
②学術化





①建築史研究の進展

具体例1）大学教科書『中国建築史』(第1版1979年)の変遷

1986年以降の研究成果反映←中国近代建築史研究会＋総覧調査

『中国建築史』第2版と第5版の比較

	第2版(1983)	第5版(2003)
体系化	建物用途（工業・住宅・公共施設・革命拠点）ごとの記述	用途・機能と技術の関係
体系化	思想の重視	技術・教育・制度・組織の重要性
学術化	社会思想・制度に影響を受けた記述：「半封建半植民地」に連動した記載＋革命拠点	「建築学」に依拠した記述：都市と建物、建物そのもの記述、革命拠点の削除
学術化	「風格」重視・論拠あいまい	既往研究の重視：中国近代建築史研究討論会論文集の活用

学術化の例:学術論文からの引用

在近代中国的港湾租借地城市、铁路附属地城市和日帝占领地城市，还有一种设于殖民统治机构内的建筑设计组织。这类建筑设计机构比较典型的有中东铁路管理局的设计部门和南满洲铁路建筑课。哈尔滨是中东铁路的交汇枢纽和铁路管理局的驻在地，前期的城市规划和铁路系统的建筑设计都是由帝俄设在哈尔滨的中东铁路管理局承办的。早期的做法是，先在圣彼得堡的中东铁路规划总部做好方案设计后，由在哈尔滨的铁路俄籍建筑师做详细设计。大约从 1917 年十月革命后，全部设计环节都改在哈尔滨进行。设于大连的南满洲铁路建筑课，在 1907 年的初创时期，就拥有 4 名毕业于东京帝国大学建筑学科的建筑师。这在当时的日本也是实力很强的设计队伍。这个建筑课作为日帝侵略机构的设计班子，承揽了南满地区铁路、港湾、矿山、工厂、学校、医院、图书馆、旅馆、宿舍等数量庞大的设计工程，是当时日本在东北地区最大的设计机构❶。

❶ 西泽泰彦《草创期的满铁建筑课》，《华中建筑》1988 年，第 3 期。

❷ ❸❺ 转引自赖德霖：《近代中国建筑师开办事务所始于何时》（台湾）《建筑师》1991 年 12 月。

❹ 参见刘凡：《吕彦直及中山陵建造经过》，《第三次中国近代建筑史研究讨论论文集》，中国建筑工 业出版社，1991 年版第 136 页。

「第十三章　建築制度、建築教育与建築設計機構」『中国建築史』第5版、366頁の一部分

学術化の例：学術論文からの引用

新艺术运动的建筑风格，以哈尔滨最为集中、显著。哈尔滨作为中东铁路的交汇枢纽和管理局驻在地，从 1898 年开始了城市建设和近代建筑活动。中东铁路系统的早期建筑都是在圣彼得堡的中东铁路规划总部进行方案设计的。这个设计部门的建筑师为哈尔滨的铁路系统建筑采用了当时最新潮的新艺术运动风格作为基调。因此，建于 1901～1903 年的哈尔滨火车站（图 14-23），建于 1902～1904 年的哈尔滨中东铁路管理局大楼，以及同期或随后陆续建造的铁路旅馆、铁路技术学校、商务学校、铁路局级官员住宅（图 12-1）、莫斯科商场、道里秋林公司等一大批建筑，都是新艺术运动风格的建筑。这些建筑都采用吻合功能的空间，较为简洁的体量，摈弃了西方古典柱式，好用流畅的曲线，展现出当时最新的建筑潮流。日本学者西泽泰彦曾著文指出哈尔滨新艺术运动建筑的若干特点：在类型上，不仅用于小型建筑，也用于公共性很强的大型建筑物；在材料上，多用木材而不是铸铁来做独特的新艺术运动式的曲线；在建造年代上，新艺术运动在西欧仅流行十几年，到 1910 年前后停止，而哈尔滨则延续到 20 年代后期，寿命长得多❶。他说："哈尔滨新艺术运动建筑之集中，在世界上是独一无二的。如果我们称哈尔滨为'新艺术运动建筑城

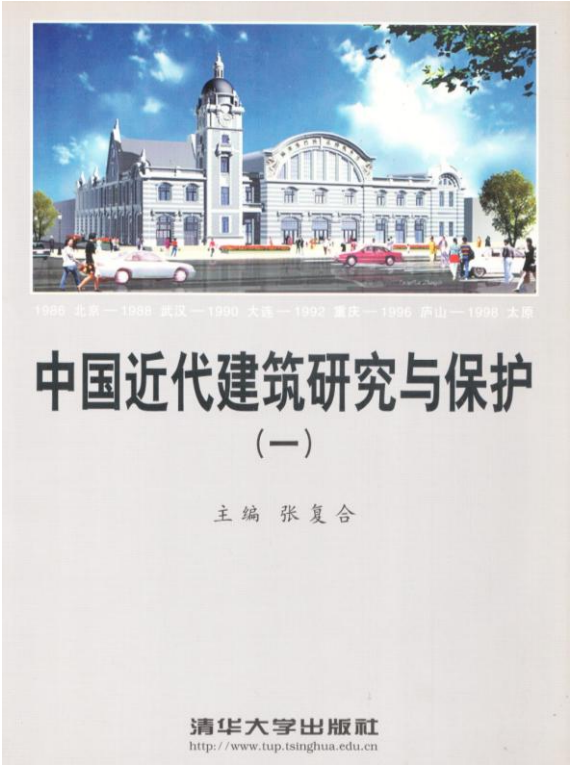
❶ 西泽泰彦：《哈尔滨新艺术运动建筑的历史地位》，《第三次中国近代建筑史研究讨论会论文集》，中国建筑工业出版社 1991 年版，第 7273 页。

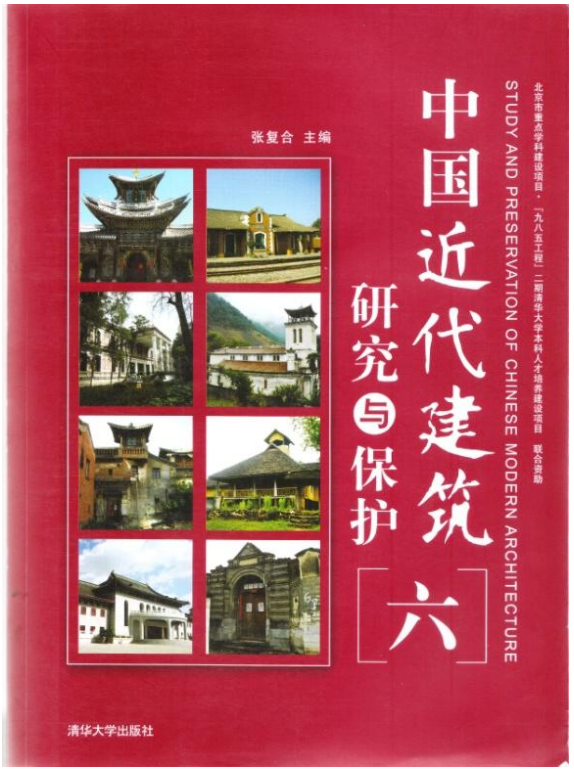
385

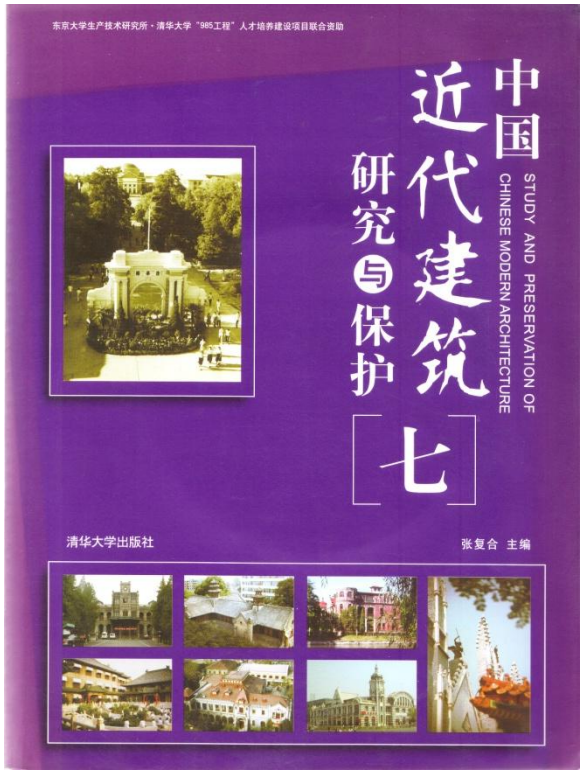
「第十四章　建築形式与建築思潮」『中国建築史』第5版、385頁の一部分

(4)中国近代建築総覧刊行の影響

①建築史研究の進展：中国建築学会(1954年設立)における新組織
1997年近代建築史学術委員会設立→学術活動の組織的保証
⇒1998年より論文集『中国近代建築研究与保存』編集担当
→採否制度：中国近代建築史研究討論会の論文掲載の採否
＋発表の採否
→研究討論会で論文集発行(第6号2008年から)







(4)中国近代建築総覧刊行の影響

①建築史研究の進展

ⅳ)研究水準の向上:1986年/2012年研究会比較〔掲載論文16→83〕

1986年:建物の印象＋伝聞＋観念的論述が多数

2012年:実測調査、文献調査に基づく論文増加

ⅴ)研究対象の拡大: 1986年/2012年研究会比較

1986年:著名建築紹介→「風格」(外観の印象)

各都市の概要→都市の歴史＋建物無関係

2012年:俯瞰的視点による変遷←個別研究の成果活用

個別建築の評価

←実測・文献調査に依拠

建築技術・構造、建築家

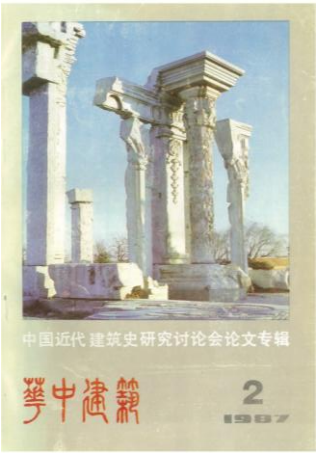
＋保存再生

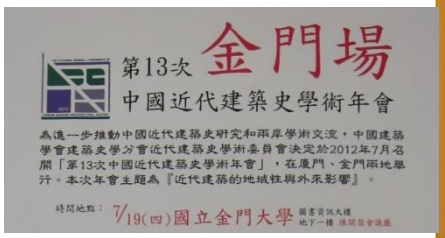
←社会的要請

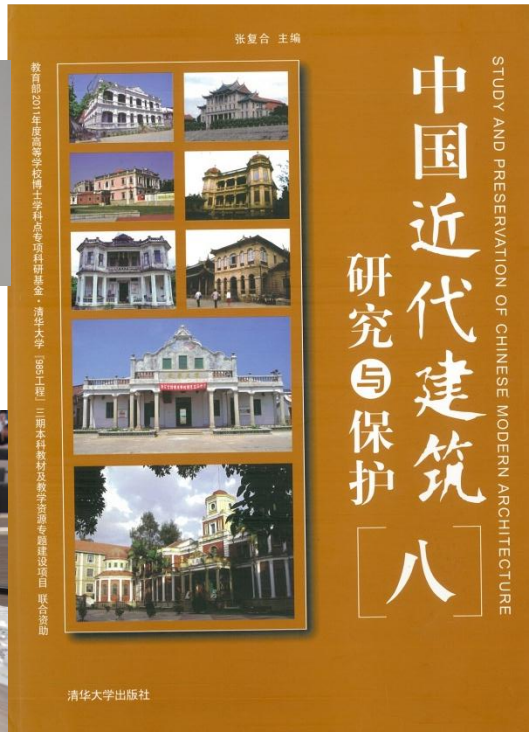
⇒個別テーマによる学術集会の開催(後述)

例1:工業遺産研究討論会

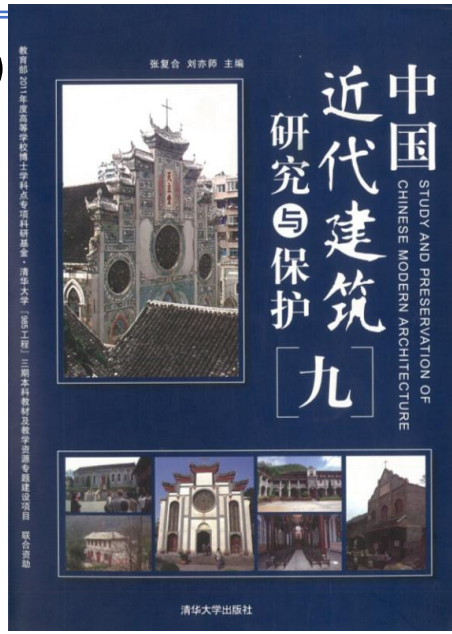
例2:近代建築技術史研究討論会







(4)中国近代建築総覧刊行の影響



例：第14回中国近代建築史学術年会(2014/7/12-13、貴陽)
　投稿論文69編→全部採択
　内容：建築技術、保存再生に関する論文増加
　ⅰ）建築技術：「風格」重視からの脱却
　　→学問体系変化、社会的要請
　ⅱ）保存再生：大規模再開発への対応＋歴史断絶の回避
　新概念提示：「西洋」と「伝統」の相克を認識
　ⅰ）「近代化概念」再考：「近代化」≒「西洋化」＋「本土化」
　　「本土化」＝各地方で伝統の上に成立していく状況
　　←中国に地域差があることを前提、「中国化」とは言わず。
　ⅱ）地域差の再認識：沿海部と内陸部の差異、「中央」「辺境」の差異
　ⅲ）工業遺産の評価：産業構造変化による再開発への対応
　ⅳ）保存再生の評価：場当たり的保存に対する問題提起
⇒総括討論での指摘
　ⅰ）研究視点の複眼化：≪人有一双眼，同时能看远近≫
　ⅱ）短絡的分析の排除：建築を総合的に評価
　ⅲ）「学風」：研究者の個性ある研究の確立
　ⅳ）技術史分野の研究促進

「本土化」を考える題材

瀋陽天主教堂/1878・1912

東三省総督衙門/1905？

奉天省諮議局/1907？

2018年7月西安で開催された
第16回中国近代建築史学術年会の立看板

感想

1）建筑技术研究增加。进入新阶段。以后，看当时人员的想办法或找窍门的内容和探索采用这些想办的理由。

2）研究保护理论也进入新阶段。基本上的保护理论和办法确立了。先调查，评价，按评价保护。
现在，对大家提问。一座建筑物的历史不是竣工的时间，从竣工到现在的建筑物的变化也是它的历史。
无论保护竣工时的样式，平面，结构，同时看从竣工后的变化。

3）个别研究和全体的关系。个别建筑物的研究越来越多了。
下来的新阶段，对各个建筑物的研究给历史上的位置。

4）形态研究的新阶段。按建筑形态比较研究时，根据形态分析能指示形态上的类似。但是对它们的关系很难说。
用其他资料明确它们的形态关系。

5）遵守发表时间。这是也发表能力之一。

祝贺学术年会成功!
谢谢大家

感想

1）建築技術に関する研究が増加しているので、新段階に入った。以後、建物建設に関わった当時の人々の考え方や設計内容を深く探求する必要あり。

2）建築保存理論の研究も新しい段階に入った。保存理論と方法は既に確立している。それは、まず調査をおこない、建物を評価し、それに基づいて保存していくことである。ただし、建物の歴史は建築家庭の歴史だけでなく、竣工から現在までも歴史である。その間の建物の変容も評価の対象とすべきである。

3）個別の建物の研究と全体の関係も考えり必要あり。個別研究は増えてきているが、次の段階は総合的な研究である。

4）形態研究も新しい段階である。ただし、形態の比較研究は、具体的な形態をきちんと示しておこなうべき。

5）発表時間を守ること。

(4)中国近代建築総覧刊行の影響

①建築史研究の進展

ⅵ)個別テーマによる学術集会の開催

a)中国工業遺産建築国際学術研究討論会

2008年7月中国近代建築史国際研究討論会にて提案

→2008年12月福州大学にて開催

主催:中国建築学会近代建築史学術委員会＋中国文化遺産研究院

目的:工業建築遺産の再評価＋保存再生促進

b)2013近代建築技術史国際学術討論会

2013年8月北京・清華大学にて開催

主催:中国建築学会近代建築史学術委員会＋清華大学

目的:近代建築技術史研究促進＋近代建築保存再生促進

c)保存再生に関する各地での学術集会←保存再生＋世界遺産

例1:第二回歴史建築遺産保護と持続的発展に関する国際会議

2010年9月天津

例2:2011東北アジア建築文化遺産国際研究討論会

2011年9月ハルビン工業大学

(4)中国近代建築総覧刊行の影響

vi）個別テーマによる学術集会の開催

b)2013近代建築技術史国際学術討論会

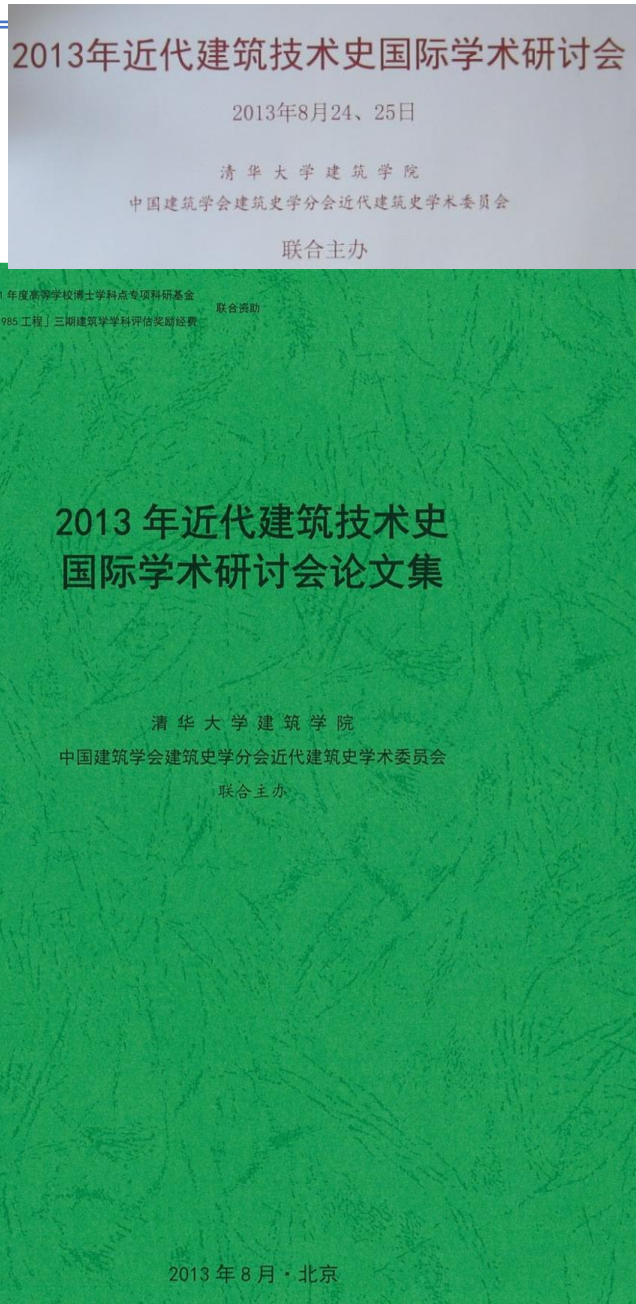
2013年8月北京・清華大学にて開催

主催：中国建築学会近代建築史学術委員会
＋清華大学

目的：近代建築技術史研究促進
＋近代建築保存再生促進
←技術史研究が手薄という反省

内容：構造形式と材料、構造形式と形態を論じる論文多数　例：トラスの形態分析

⇒構造理論理解不足により論理性欠如、「風格」論の悪影響＋建築教育問題



结语 浓尾地震的影响与抗震研究的开始

結論　濃尾地震の影響と耐震研究の開始

浓尾地震之后建筑界对策的学术成果

1）冷静地分析地震被害实况
→ 不仅砖结构也推进木结构建筑的抗震

2）建筑被害调查成为以后地震被害调查的起点
→ 持续到今日

3）震灾预防调查会《事业纲要》
→ 今天抗震研究的框架和方向

科学手法

4）1915年佐野利器发表“房屋抗震结构论”
地震力=房屋重量×0.3
[应用牛顿力学]
→ 今天日本抗震理论的基础

建築史研究者は先人たちがおこなった耐震研究を再確認し、それを再評価し、その考え方を学ぶべきである。

建筑历史学者应该再看先人们的抗震研究，再评价，学习想法。

本论文为日本学术振兴会科学研究辅助金・基盘研究C（课题番号25420667）成果的一部分。
感谢东京大学生产技术研究所包慕萍博士的翻译。

演讲完了，谢谢大家

(4)中国近代建築総覧刊行の影響

②文化財指定の進展

ⅰ)近代建築の評価に基く文化財指定

⇒租界などに建てられた外国人建築家設計の建物の再評価

例1:Aster House(上海) Modern Hotel(哈爾賓) 奉天ヤマトホテル(瀋陽)

上海市優秀歴史建築(1999)

黒竜江省文物(1999)

全国重点文物(2013)

ⅱ)一点名物主義からの脱却

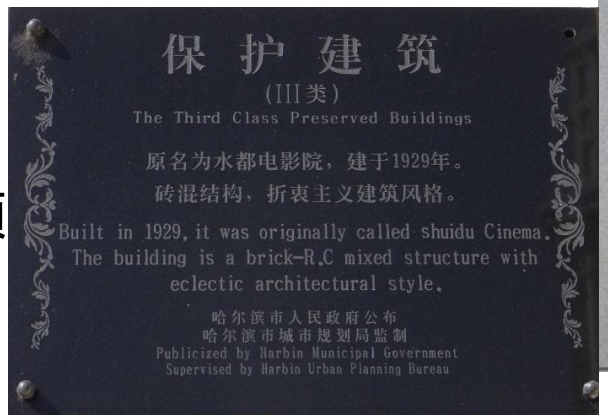
多様な文化財指定方法の確立

上海市:優秀歴史建築

⇒文化財指定とは区別

ハルビン市:

保護建築Ⅰ類、Ⅱ類、Ⅲ類



(4)中国近代建築総覧刊行の影響

③都市再生での活用

ⅰ)指定文化財の積極的活用

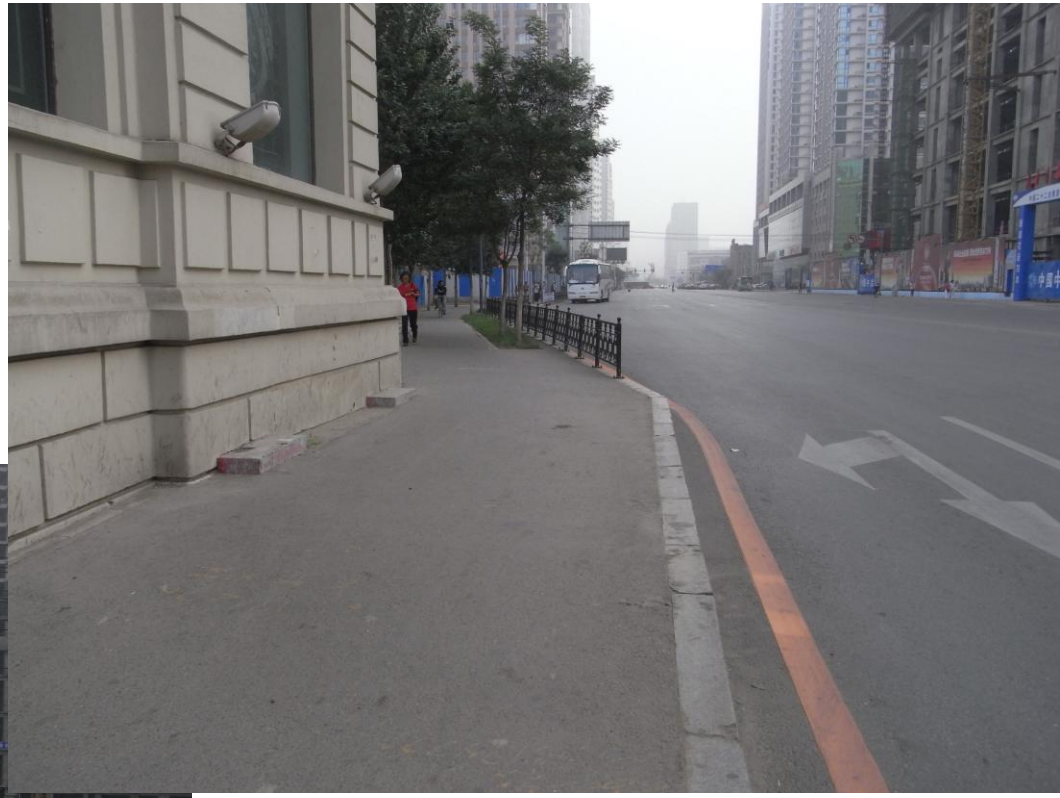
ハルビン：Ⅰ類・Ⅱ類・Ⅲ類→Ⅲ類(外壁保存)の積極的活用

(4)中国近代建築総覧刊行の影響

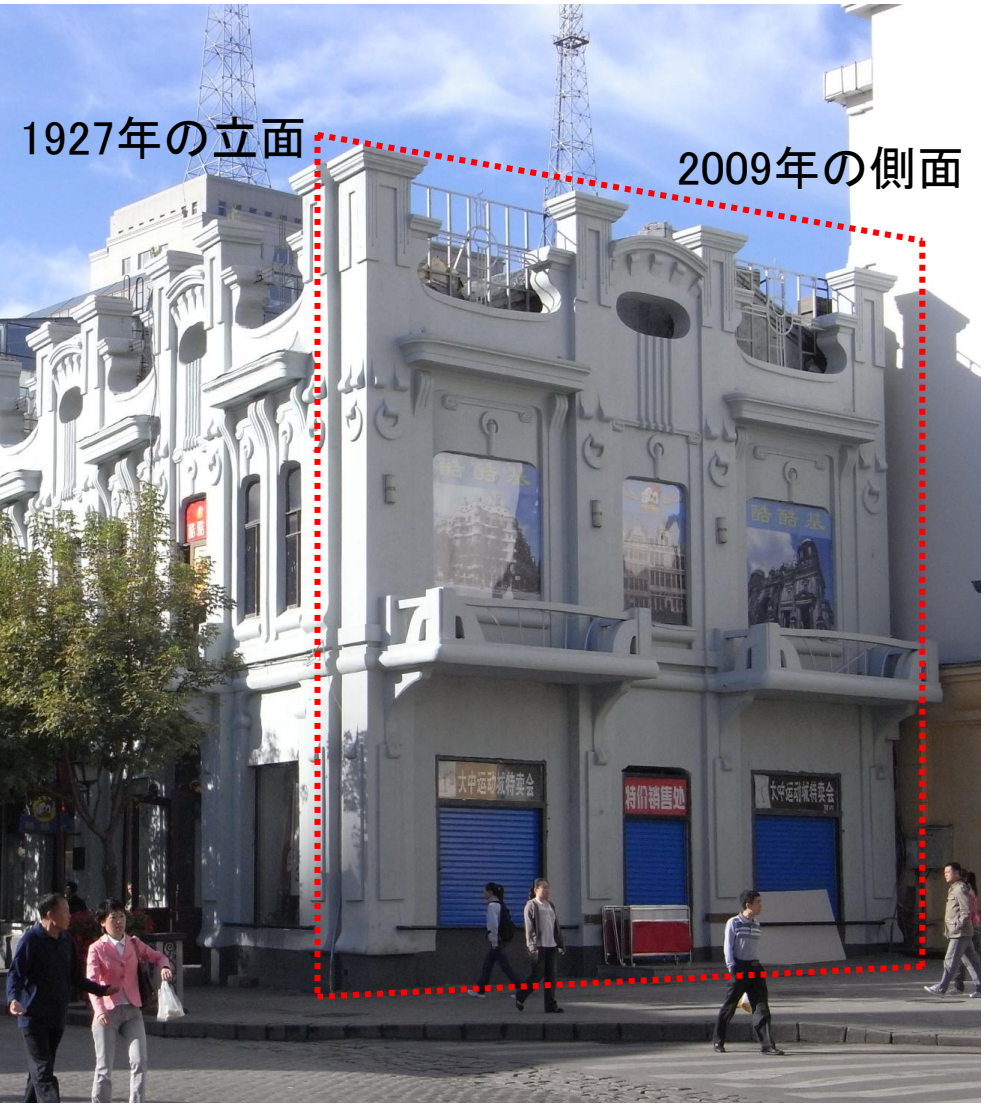
③都市再生での活用

ii)指定制度の多様化:

瀋陽:不可移動文物



④想定外の展開(1):21世紀のアール・ヌーヴォー



カフェ・ミニアチュール(1927年竣工)
左:2009年撮影　右:2012年撮影

④想定外の展開(2)　中華バロック街の再生

中華巴洛克建築(1985年の造語)；
　何となくバロック建築に似ている→詳細は中国建築の意匠
　　⇒都市の繁華街に出現

1995年増田彰久撮影

④想定外の展開(2)；中華バロック街の再生

上：1990年撮影
下：2009年撮影

中華バロック建築のブランド化

(5)「総覧」が残したもの

『日本近代建築総覧』

『中国近代建築総覧』

①新たな調査研究を誘発

近代和風調査/近代化遺産調査

教科書書き換え/研究会定例化

②文化財建造物の概念拡大

擬洋風建築
近代和風建築
土木構造物

伝統的建築とは異なる建築への評価

新芸術運動
中華巴洛克
擬華風建築
擬洋風建築

③地域での文化財保護の啓発

「身近な文化財」の誕生

④歴史まちづくり/地域再生の起点

歴史的建造物の再生活用⇒地域再生
弊害：適当な活用＋観光資源に偏る評価

両方に関わって40年、いい経験といい出会いがあり、幸せでした。皆さんに感謝します。